秋田県文化財調査報告書第32集

城土手遺跡緊急発掘調査報告書
海老沢窯跡緊急発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

1950・3

秋田県教育委員会

序

広域営農団地農道整備事業の能代，山本地区工事は，県農政部農地整備課及び県土木部道路課の計画によって，昭和48年度から（全長30,568メートル）路線工事が予定されていた。農道整備予定路線上の山本郡峰浜村所在の「城土手遺跡」は，縄文時代から歴史時代に至る遺跡として周知されている。工事着工前に遺跡の性格を解明し，記録を保存するため緊急発掘調査を実施したのである。

又，南秋田郡若美町所在の海老沢窯跡は，秋田県営琴浜地区畑地帯総合土地改良の農道整備事業（全長 1,723m，福米沢～八ツ面間）に係るものである。

農地整備の農道工事等に関係する遺跡の保護と，その記録保存のため緊急発掘調査を実施したが，本報告書が研究者をはじめ，遺跡に関心を持っておられる方々に広く活用される事を期待すると共に，両調査にあたられた調査員各位に対し，深甚の謝意を表する次第です。

昭和５０年３月

秋田県教育委員会教育長　山　本　　一

目　　次

城土手遺跡緊急発掘調査報告書

1　発掘に至るまでの経過……1
2　発掘調査の経過……1
3　城館付近の地形と現状……3
4　遺　　構……4
5　出土遺物……12
6　む す び……15

挿　図

第１図　城館遺跡位置図……5
第２図　城館遺跡調査全域図……6
第３図　Ａ地区実測図……7
第４図　Ａ地区Ⅰ－１の実測図……7
第５図　Ａ地区Ⅰ－３，４，Ⅱ－３の実測図……7
第６図　Ａ地区溝状遺構実測図……8
第７図　Ａ地区Ⅰ－２の実測図……9
第８図　Ｂ地区実測図……9
第９図　Ｂ地区円形ピット実測図……9
第10図　Ｂ地区方形ピット実測図……9
第11図　Ｅ地区実測図……10
第12図　土器実測図……11
第13図　土器，石製品実測図……13
第14図　縄文土器拓影図……14
第15図　鉄製品実測図……15

図　版

1　遺跡遠景，段丘上の状況……17
2　Ａ地区発掘前の状況，発掘風景……18
3　Ａ地区遺構……19
4　Ａ地区遺構複合の状況，土器出土状態，砥石出土状態……20

5　A地区溝状遺構の礫の状態，A地区溝状遺構の断面……21
6　B地区円形ピット，B地区方形ピット……22
7　出土遺物……23

海老沢窯跡緊急発掘調査報告書

1　発掘調査経過……24
2　海老沢窯跡付近の地形と現状……27
3　窯の構造……27
4　出土遺物……29
5　出土遺物実測数値表……36
6　む す び……39

挿　図

1　海老沢窯跡周辺地形図……26
2　海老沢窯跡全体図……28
3　3号窯跡実測図……28
4　4号窯跡実測図……30
5　3号窯跡出土土器実測図……32
6　3号窯跡出土土器実測図……33
7　3号窯跡天井部の上出土土器実測図……35
8　4号窯跡出土土器実測図……35

図　版

1　海老沢のようす……42
2　窯跡遠景，発掘風景……43
3　3号窯跡発掘風景，1号窯跡……44
4　3号窯跡……45
5　3号窯跡土器出土状態……46
6　4号窯跡，土器出土状態……47
7　3号窯跡出土土器……48
8　3号窯跡出土土器……49
9　3号窯跡出土土器……50

10　3号窯跡出土土器……51
11　3号窯跡出土土器……52
12　3号窯跡出土土器……53
13　3号窯跡出土土器……54
14　3号窯跡出土土器……55
15　3号窯跡出土土器……56
16　3号窯跡天井部の上出土土器……57
17　4号窯跡出土土器……58
18　4号窯跡出土土器……59

城土手遺跡緊急発掘調査報告書

1　調査に至るまでの経過

昭和48年に秋田県農政部農地整備課による山本郡峰浜村目名潟地区から，能代市，山本郡山本町を経て八竜町鵜川地区にいたる能代山本地区広域農道が計画され，昭和49年度から用地の買収と工事の一部着工が行なわれることになった。本遺跡は，その予定路線上に位置しており，しかも，農道工事の第一工区にあたることから，県文化課，峰浜村教育委員会が工事着工以前に遺跡の実態把握と今後の保存に対処するために発掘調査を計画されたものである。

2　発掘調査の経過

①　調査の構成

イ　調査主体　　秋田県教育委員会，山本郡峰浜村教育委員会

ロ　調査期間　　昭和49年７月27日～８月７日（12日間）

ハ　遺跡所在地　秋田県山本郡峰浜村塙字横内城土手

ニ　調査員

由利郡東由利町立玉米小学校教諭　伊　藤　種　秋　（日本考古学協会員）

秋田市立高清水小学校教諭　岩　見　誠　夫　（日本考古学協会員）

山本郡山本町立森岳小学校教諭　永　瀬　福　男　（日本考古学協会員）

山本郡峰浜村水沢　阿　部　清　文　（秋田考古学協会員）

・調査補助員

能代市立鶴形中学校長　若　松　鉄四郎　（秋田考古学協会員）

山本郡二ツ井町立二ツ井中学校教諭　村　木　悦　也　（秋田考古学協会員）

山本郡峰浜村教育委員会文化財専門研究員　鈴　木　正　男

能代市立東雲中学校教諭　太　田　　実　（秋田考古学協会員）

・調査事務担当者

秋田県教育庁文化課　門　間　光　夫，中　谷　雅　昭，佐々木　大　晃

山本郡峰浜村教育委員会社会教育主事補　島　津　宣　夫

・調査協力

地元　横内部落，大沢部落，石川部落の有志

② 調査日誌

○７月27日（土） 晴

８時30分，阿部，鈴木，岩見，永瀬，伊藤遺跡到着。道路予定路線上より東30ｍの地点を中心にグリット設定（５ｍ×５ｍの南北１～４，東西Ⅰ～Ⅳの 300㎡）。これをＡ地区とし，発掘にとりかかる。午後ＡⅠに，径２ｍほどの円形ピットを検出。出土遺物は土師器片，鉄製品破片。

○７月28日（日） 曇のち雨

９時作業開始。昨日検出された円形ピットを調査。深さ20cm，ピット内から土師器出土。ＡⅠの南隅の表土から17cmの深さで，川原石が30個ほどかたまって出土。その中に土師器や須恵器の破片が混入。そのすぐ近くで砥石が出土。ＡⅠ－３のピットから完形土師器杯出土。ＡⅠ－３から複合している数個のピットが検出される。

道路予定路線上にグリット設定（５ｍ×５ｍ南北１～４，東西Ⅰ～Ⅲの 250㎡）Ｂ地区とする。ＢⅠ－１，２，Ⅱ－１，４を掘り下げる。Ⅰ－２の西隅に土師器甕の破片がかたまって出土。

○７月29日（月） 雨

終日雨。９時作業開始。Ａ地区ピットは，雨天のため精査できず。他のグリットの掘り下げに力を注ぐ。

ＢⅠ－１，Ⅱ－３の表土除去。この地区から，円形ピット・方形ピットが現われ，まわりに柱穴状のピットを発見。

道路予定路線上の段丘周縁に２ｍ×３ｍのトレンチを設定発掘。遺構なし。

北羽新報平川記者来跡。

○７月30日（火） 雨 作業中止。

○７月31日（水） 曇時々雨

８時40分作業開始。ＢⅡ－２，Ⅲ－３の表土除去。Ａ地区の排水をする。

道路予定線上のＢ地区から10ｍはなして，北側の沢の降り口に５ｍ×８ｍのトレンチを設定，Ｄ地区とし発掘。作業は雨天のため午前で打切り。

○８月１日（木） 雨のち曇

９時作業開始。Ｄ地区の掘り下げ，Ｂ地区南に存在する沢を発掘，遺構検出されず。トレンチの底からは湧水がはげしい。Ｅ地区とする。

段丘の水田化される以前の地形の残っていると見られる東地区の畑地にグリット設定（３ｍ×３ｍの南北Ⅰ～Ⅲ，東西１～12）Ⅰ－１，Ⅲ－１，Ⅶ－１を掘り下げる。地層は深耕のため撹乱がはげしい。出土遺物は縄文土器片，土師器片。Ａ地区の排水続行。

○８月２日（金） 曇時々晴

8時30分作業開始。F地区の段丘東縁に5m×5mのトレンチを設定し、G地区とする。遺構検出されず。出土遺物は縄文土器片，土師器片。

B地区円形ピットの精査。表土下30cmの所で砥石出土。このピットのまわりに柱穴と考えられるピットがならぶ。II－3の方形ピットでは，深さ40cmで高台のついた土師器杯出土す。

AI－4，II－3の精査，グリットの東側に溝状遺構が検出される。鉄製品，鉄滓が出土。

峰浜村助役，教育長，県文化課門間光夫主事，中谷雅昭主事来跡。

○8月3日（土）　晴

A地区のピットの精査。I－1下部からピットが検出される。この円形ピットは複合しており，小ピットを大ピットが切っている。

A地区とB地区の中間に3m×6mのトレンチを設定し，A' 地区とする。柱穴状の小ピット数個検出。他に遺構なし。

○8月4日（日）　曇一時雨

B地区の実測を行なう。F地区，G地区埋戻しを行なう。

AI－4，II－3にかけてのグリットの端を精査。幅 1.2mくらいの溝状遺構が，北東から南東にかけて走る。その埋土の上部で川原石が広い範囲にわたって出土。AI－1の円形ピットを実測。

○8月5日（月）　曇時々雨

A，B地区の実測と写真撮影を行なう。AI－2の石組遺構を調査。I－4の溝状遺構の川原石の実測を行なう。

C，D地区の埋戻しを行なう。

○8月6日（火）　曇一時雨

AI－4，II－3にかけての溝状遺構を掘り下げ断面を調査。湧水はげしく調査難行。出土遺物は砥石と石皿破片。E地区埋戻しをする。

○8月7日（水）　曇のち雨

A地区複合ピット群の調査と実測。ピット内から湧水はげしい。午後3時，発掘作業完了す。

3　城館附近の地形と現状

本遺跡は，五能線沢目駅南東3kmにある横内部落の西側標高40mの段丘上に位置し，秋田県遺跡地名表に 415番として記載されている。

峰浜村は，米代川河口左岸から青森県境に近い海水浴でにぎわう岩館海岸を持つ八森町との間にある村で，砂丘が多く海岸近くまで標高30m～ 100m前後の出羽丘陵がせまり，丘陵間の沢に

集落が形成されている。

遺跡は，第４紀火山灰層上に位置し，東側を塙川が流れ，北側に寺館，中館，大館とよばれる空濠をもつ館址があり，遺跡から東約 1.5㎞に遺物散布地として外林遺跡がある。本遺跡は，一応館址として性格づけがなされているが，旧地形は，昭和30年代のある時期に横内部落のエイトグループによって，開墾がなされ水田として利用されるようになったため，段丘そのもの，即ち館址の地形は可成り変形されている。残っているところといえば，沢になっている排水を兼ねたくぼ地だけである。なお，この地形から考えて峰浜村水沢に至る台地上には，相当数の遺跡があると思われる。

4　遺　　構

広域農道建設に伴う調査のため，道路予定路線上の畑地を中心に調査を実施した。

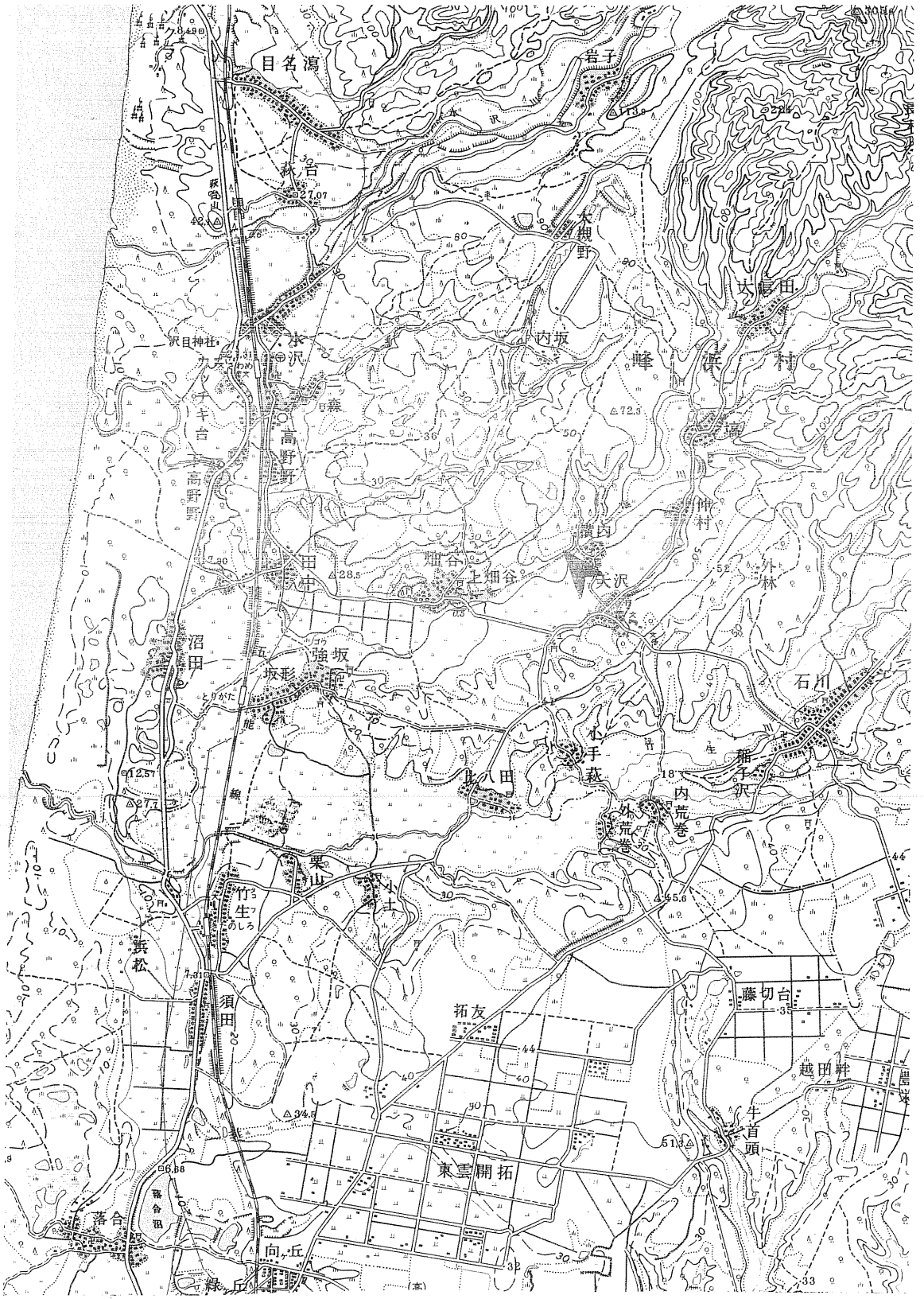
①　A地区

遺構は，道路予定路線上のすぐ東側で，耕作土下の粘土質火山灰土層(基盤)上に残されている。

ＡⅠ－１の，小円形ピットは東西径1.26ｍ，南北径1.36ｍで，大円形ピットは，東西径２ｍ，南北径 1.8ｍである。小円形ピットと大円形ピットをみると，小円形ピットがこわれた後に近接して大円形ピットがつくられたものである。大円形ピットの下に小円形ピットの壁が，10㎝ほど入っていることから，小円形ピットが古い時期のものであることがわかる。両ピットとも，中央部で深さ20㎝の碗状にくぼむ円形ピットであるが，内部に柱穴とみられるものがなく，ピットの外部に径20㎝～30㎝位の柱穴が数個配列され，どれも深さ15㎝～20㎝である。

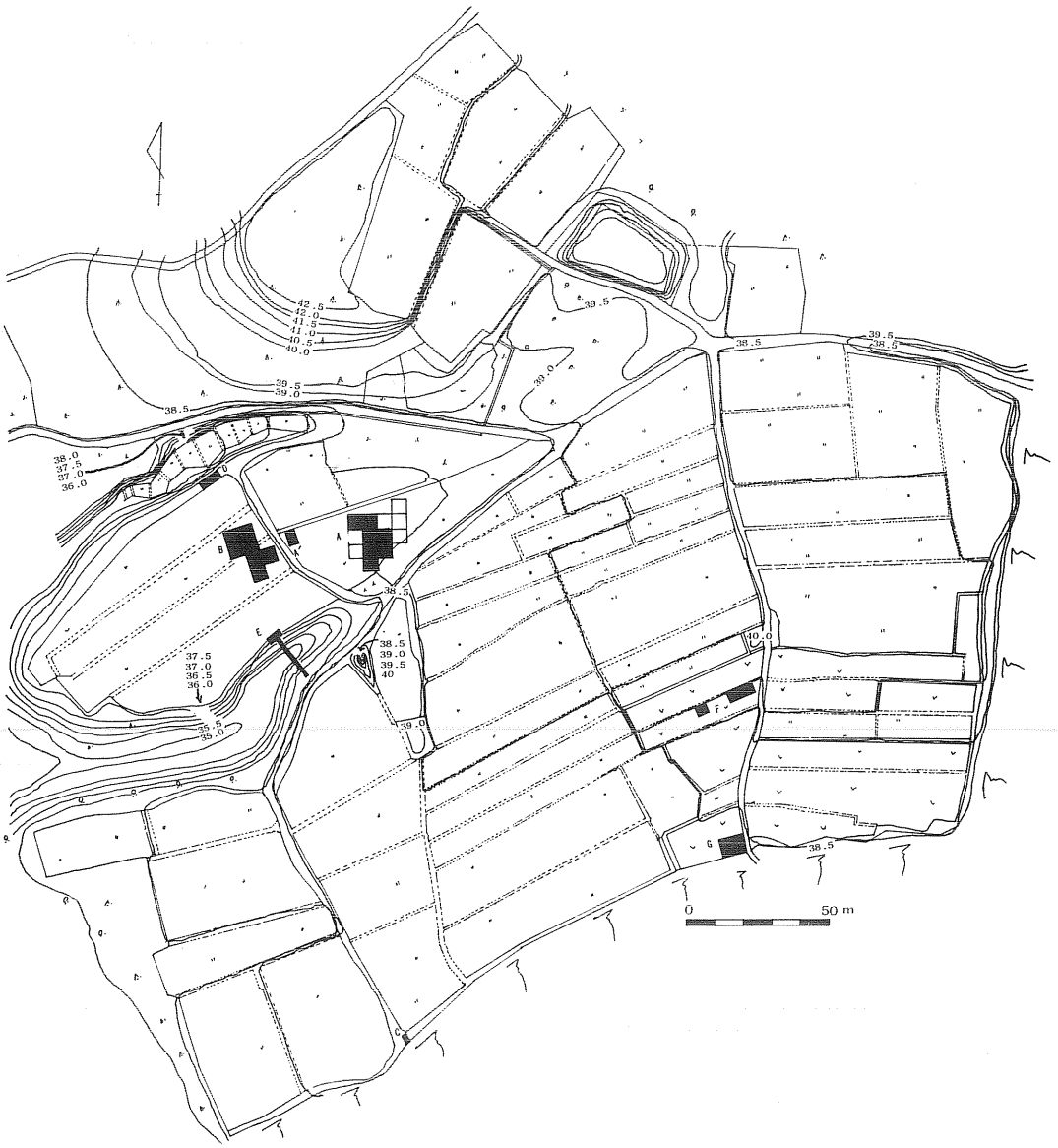
円形ピットの堆積物をみると，上部から混入の焼土と粘土まじりの褐色土であり，土師器片が出土した。

ＡⅠ－３，４，Ⅱ－３にかけては，小円形ピット，東西径１ｍ，南北径１ｍ弱，深さ40㎝のものと，大円形ピット，東西径 2.2ｍ，南北径２ｍ，深さ中央部で40㎝のものが５個検出された。この円形ピット内からは木炭片，土師器が出土した。この円形ピットから，幅18㎝，深さ５㎝～

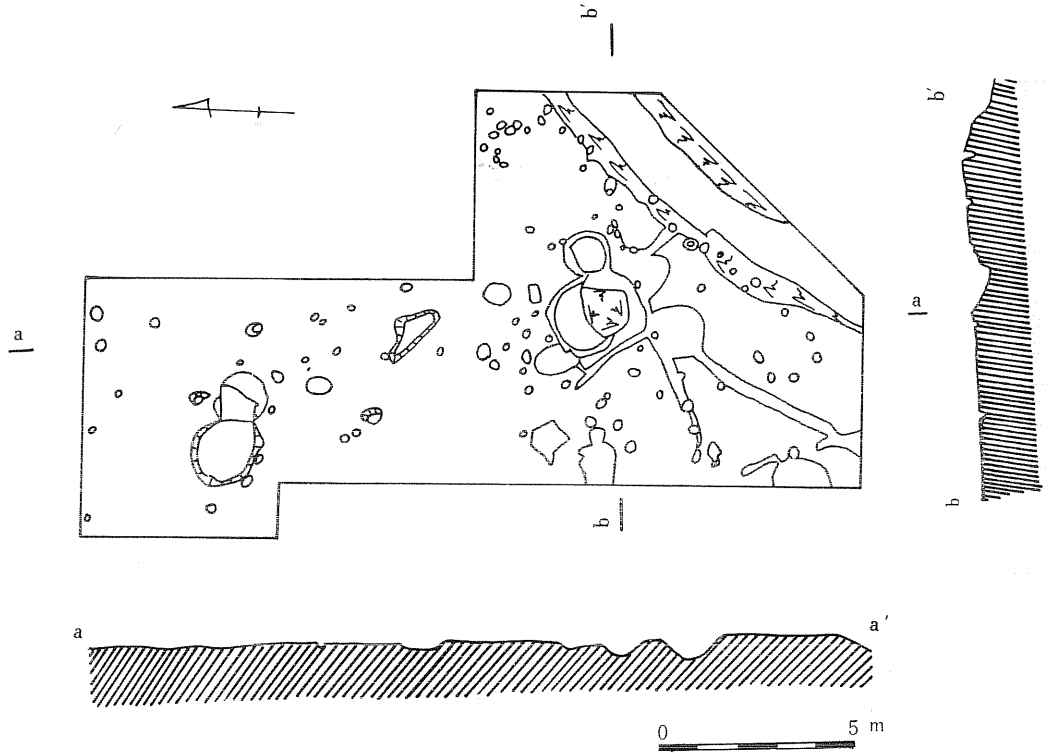

目名潟
岩子
萩台
大槻野
内坂
峰浜村
水沢
高野野
田中
畑谷
上畑谷
大沢
仲村
外林
沼田
強坂
坂形
石川
小手萩
稲子沢
比八田
内荒巻
外荒巻
栗山
竹生
小土
浜松
須田
拓友
藤切台
越田畔
牛首頭
東雲開拓
落合
向丘
緑丘

第１図　城館遺跡位置図

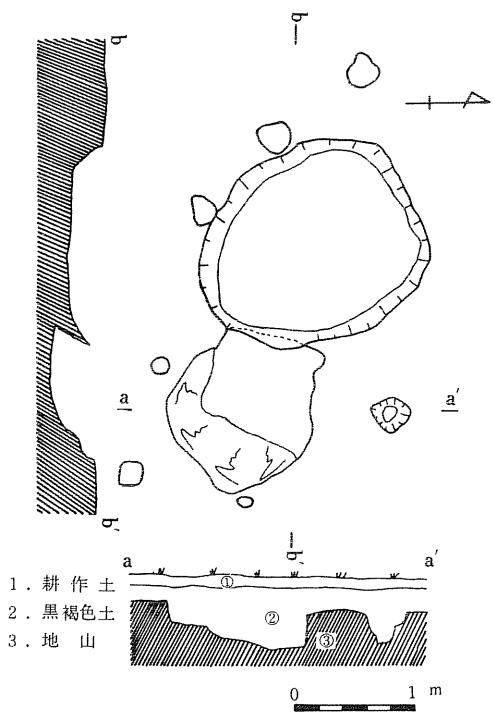
第２図　城館遺跡調査全域図



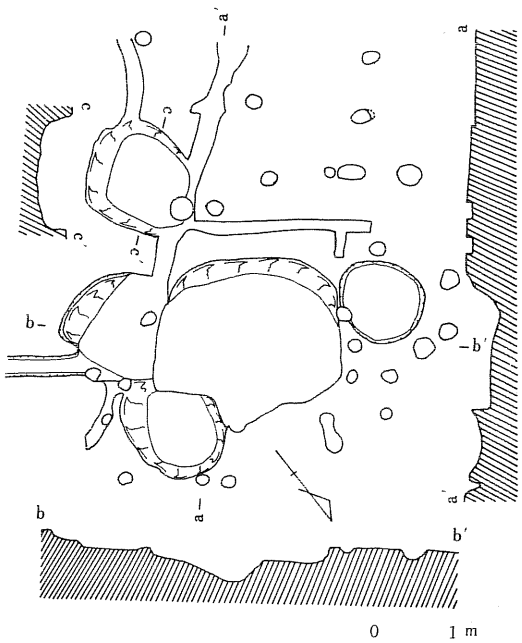
第３図　Ａ地区実測図



第４図　Ａ地区１－１実測図



第５図　Ａ地区１－3,4実測図

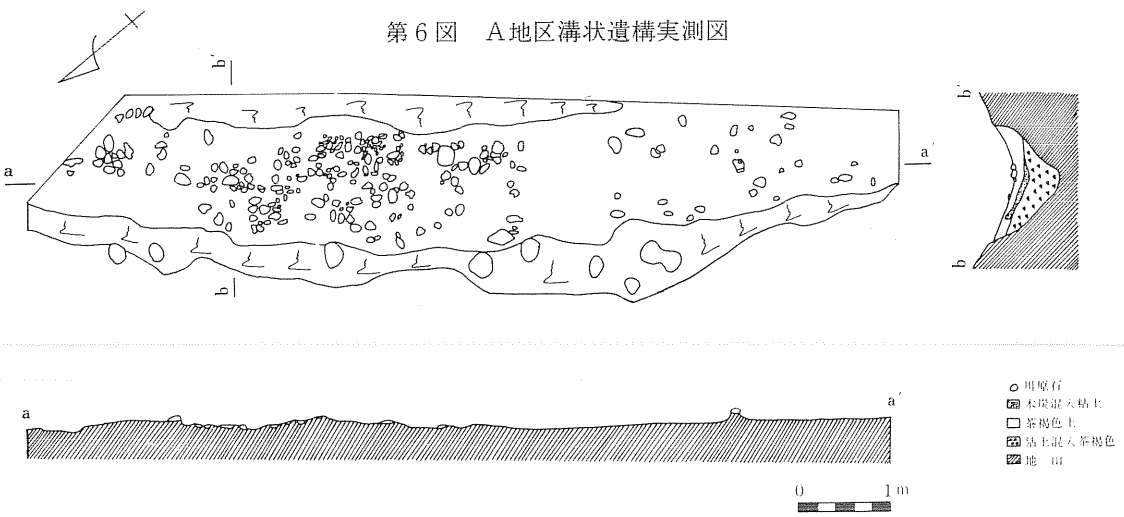


10cmの溝が放射状に走っているものもある。ピットの埋土は，焼土に木炭，土師器片がまじったもので，ＡＩ－１でみられるようにおたがいの切り合いからみて，小円形ピットの使用された後に大円形ピットが構築されたものと考えられる。これらの円形ピットの周囲には，不規則に径20～30cmで深さ10cm～30cmの柱穴が存在したが，どの柱穴がどのピットに伴うのかという検証はできなかった。

Ａ地区では，大小の円形ピットが複合して検出されたが，ピットの切り合いから考えて，小円形ピットが廃棄されたあと，大円形ピットが構築されたものと考えられる。

この地区の東端，グリットＩ－３，４，II－３の田の畦のそばから，幅 1.5m，深さ 1.2m～1.3mほどの溝状の遺構が検出された。この遺構はＶ字状を呈し，大小の円形ピットのある時期のものと同一と考えられるがはっきりしない。底部から１ｍ上部の埋土には，こぶし大の川原石が多く散在していた。溝状遺構の片側には不規則な形で柱穴が並び，南側の沢に続いていた。出土遺物は，砥石，石皿の破片である。

第６図　Ａ地区溝状遺構実測図



ＡＩ－２グリットの南側に，こぶし大の川原石と土師器片，須恵器甕の破片が，径１ｍの範囲にわたって，堆積していた。

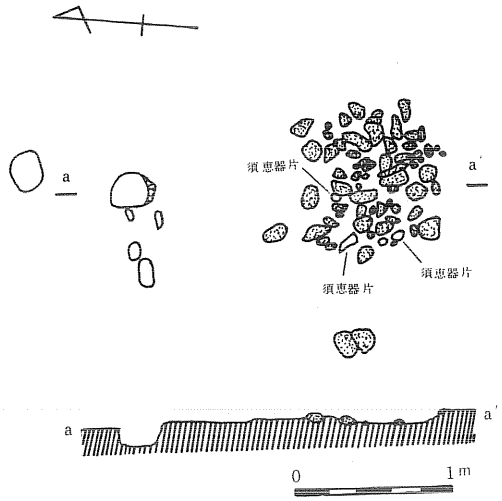
本Ａ地区の出土遺物は，糸切り底の土師器杯，須恵器甕胴部破片，携帯用の砥石，鉄製品である。

②　Ｂ地区

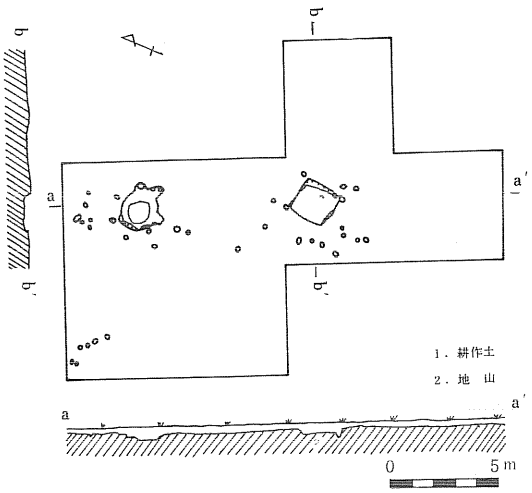
ＢII－１で検出されたのは，東西1.8m，南北1.8m，深さ34cmの円形ピットで，ピットの外側に径20cm，深さ10～15cmの柱穴が存在した。埋土の状態は，上部から褐色砂層，灰白色粘土混入層，木炭混入褐色砂層，基盤粘土層となっている。このピットの埋土からは，携帯用砥石１個と土師器片が出土している。

ＢII－３からは，方形ピットが検出された。その長辺は，略東西を指すもので，壁は垂直に落

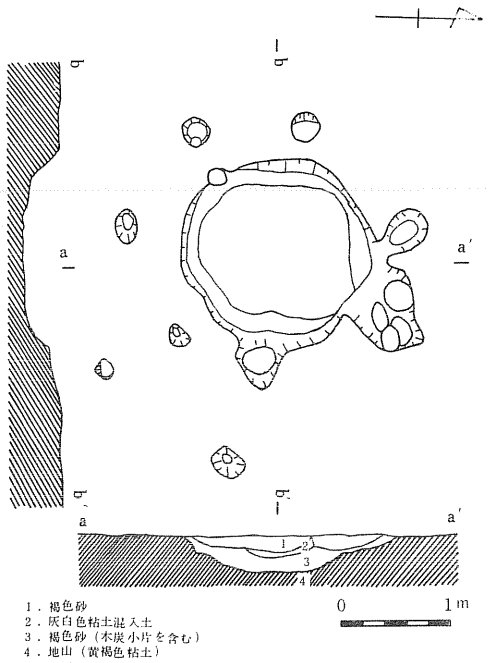
第７図　Ａ地区Ⅰ－２の実測図



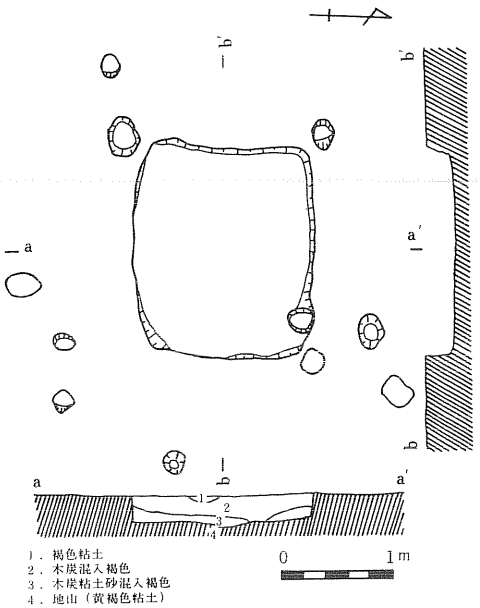
第８図　Ｂ地区実測図



第９図　Ｂ地区円形ピット実測図



第10図　Ｂ地区方形ピット実測図



ち込み，床面は平らで，かなり火にかかったらしく赤褐色に焼けていた。大きさは，南北 1.7m，東西1.85m，深さ20cmの隅丸方形と称したほうがよいものである。ピットの埋土は，床面に近づ

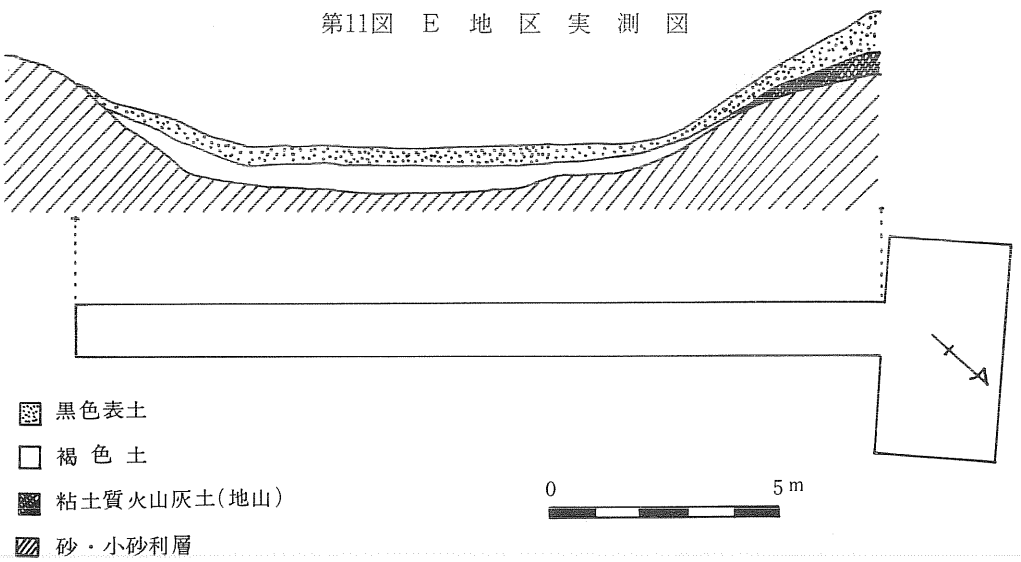
くに従って木炭片が多く，床面３cmほどは殆んど木炭片のみであった。ここからは，高台内に糸切り痕の見られる台付の土師器杯が出土した。

また，円形ピットと方形ピットとの距離は，中心間で 8.5m あった。

③　E地区

農道予定路線上の段丘に入り込んで来ている沢を割るように設定した20m × 1.5mのトレンチである。沢は，水田造成のためブルドーザによる押土によって，かなり上部は埋っていた。空濠でないかと考えられるため調査したものであったが，発掘部分には人工的に構築した痕跡はみられなかった。

第11図　E　地　区　実　測　図



④　C地区，D地区，F地区，G地区

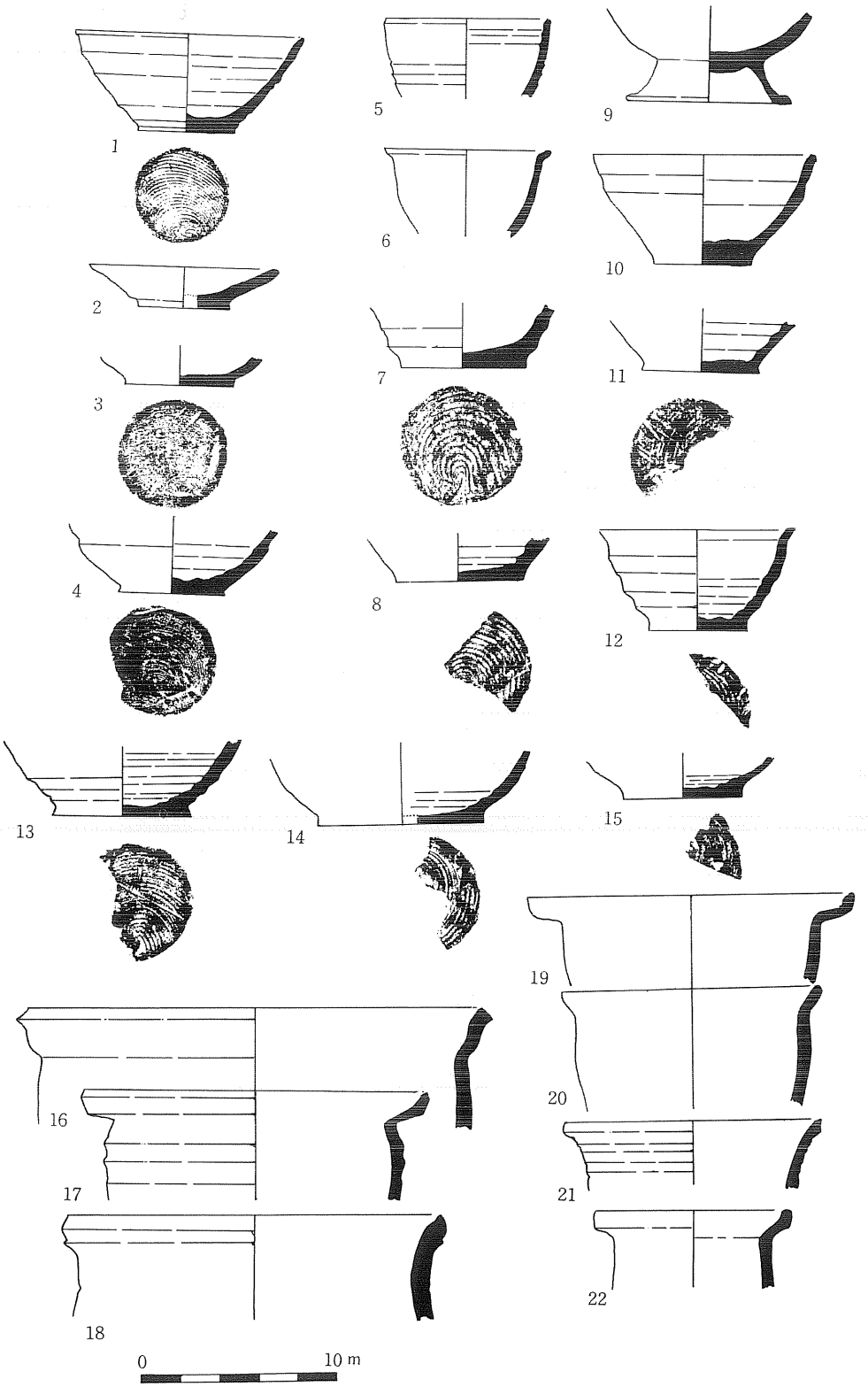
C地区は，農道予定路線上の段丘東縁に設定したトレンチである。遺構は検出されなかった。

D地区は，段丘北縁の沢におりる個所に設定したトレンチである。遺構は検出されなかった。

F地区は，段丘の大半が，ブルドーザで水田化されているが，旧地形の残っていると見られる中央部の一段高い畑地である。グリットを設定し発掘して見たが，畑作深耕によって層位が撹乱され，一部には，それが基盤の粘土質火山灰土層にまでおよんでいた。縄文中期大木８ｂ，９式土器片，土師器片が出土した。

G地区は，F地区の南東にあたる段丘縁に５m × ５mの規模で設定したトレンチである。遺構は検出されず，土師器小片と縄文のみが施文された縄文土器片が出土した。

第12図　土　器　実　測　図



5　出土遺物

①　土器　（12図，13図）

(イ)　土師器，杯，碗類

1は，口径11.6cm，底径5cm，高さ5cmの底部回転糸切りによる赤褐色を呈する杯である。2は，口径9.6cm，底径2.1cm，高さ 2.1cmの皿で灰褐色を呈する破片である。 3は，底径 5.4cmで回転糸切りの破片である。 4は，底径 5.4cm，現存高 3.5cmの段を持つ杯の破片で褐色を呈する焼成不良の破片である。 5と6は，杯の破片で，推定口径8cmの内黒土師器片で，6は口縁が外反する。7は，底径6cm，現存高 2.8cmで太い糸切痕を有する杯である。 8は，底径 6.5cm，現存高 2.3cm，内部にろくろ目痕を持ち底部に糸切痕を有し焼成の悪い赤色を呈する杯である。9は，B地区方形ピット内出土のもので脚底径8.5cm，接合部径 5.6cmで，この部分に糸切り痕を持つ高さ 4.5cmの高台を持つ赤褐色の高台付杯である。10は，口径11.5cm，底径5cm，高さ 5.6cmの赤色の焼成不良のもので，本遺跡唯一の完形土器であり接合部に糸切り痕を有する。11は，底径6cm，現存高 3.2cmの糸切り痕の底部で，赤色を呈する杯の破片である。12は，口径10cm，底径5cm，高さ 5.2cmの糸切り底の褐色を呈する碗の破片である。13は，底径7cm，現存高 3.8cmの糸切り底の杯である。14は，底径 8.4cm，現存高 3.5cm，底部糸切りの碗型土器片である。15は，底径6cm，現存高2cmの赤褐色の糸切り底を持つ碗型の土器片である。

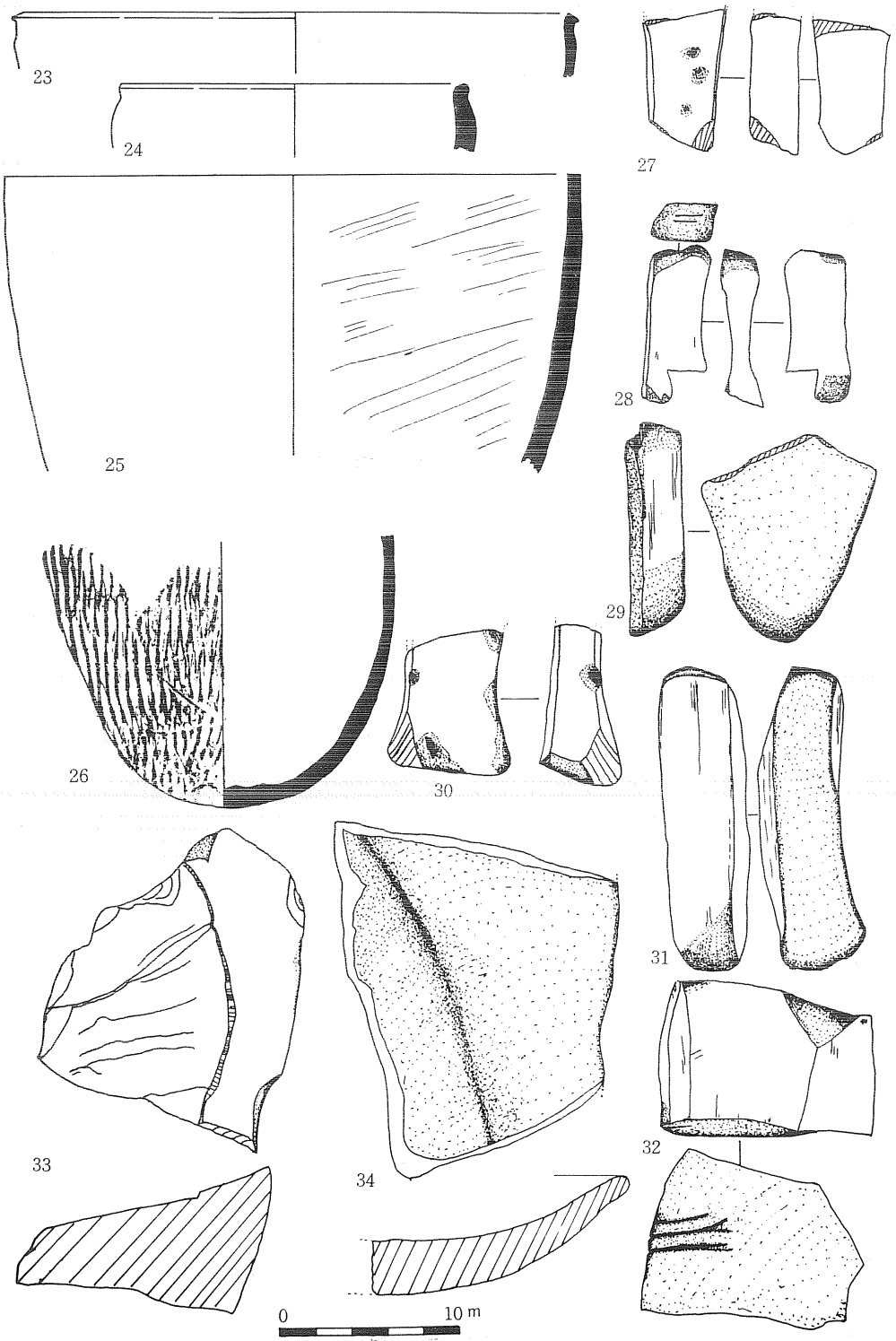
以上のべた杯，高台付杯，碗型の土器は，ろくろによる成型で，底部は糸による切りはなしである。

(ロ)　土師器甕型土器

16は，推定口径24.2cmで，赤褐色を呈し，ろくろ仕上げによるもろい土器である。17は，推定口径17.4cm，褐色を呈する焼成のよくないもろい土器で口縁が外反している。18は，茶褐色を呈し，推定口径19cmである。19は，推定口径16.6cmで赤褐色を呈し，外反する口縁部の破片で焼成はよくない。20は，推定口径13.2cmで，赤褐色を呈すもろい破片である。21は，口径13cmで，淡赤色を呈しもろい。 22は， 推定口径10cmの小型の甕の破片で， 褐色を呈し外反の口縁を持つものである。23は，推定口径20cmで胴部にふくらみを持ち褐色を呈する大型の土器片である。24は，推定口径19cm，胴部がふくらむ褐色の土器である。25は，推定口径31.6cmの大型の甕の破片で，平口縁をなし器の内面には擦痕がみられる。26は，口縁部の欠損した長胴の甕と思われる土器である。底部は丸底で表面黒褐色を呈し，内面には残滓状の炭化物が付着している。また，土器表面には太い沈線状の調整痕が見られる。

(ハ)　須恵器

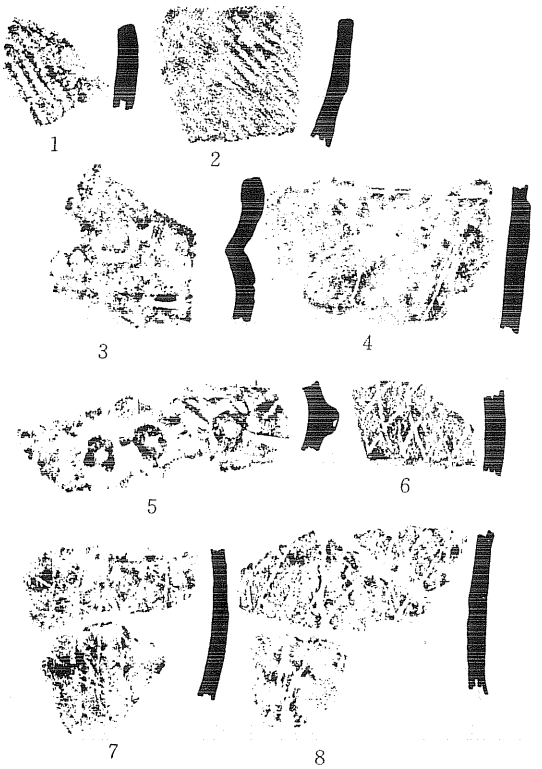
第13図　土器・石製品実測図



叩目のある甕の胴部破片である。

㈡ 縄文土器　（第14図）

第14図　縄文土器拓影図



14図は，Ｆ地区出土のものである。

１と２は，平口縁でＬＲの縄文が付されている。３は，山形の口縁を有する土器片で頸部に沈線がめぐらされている。４は，沈線によって画された中に縄文の見られる大木９式の土器片である。５は，口頸部の一部分で，ぼたん状突起のあるものである。６，７，８は，縄文を網代状に付したもので，７と８は同一個体のものである。

②　石製品　（13図27～34）

27は，破損品で長さ７cm，幅 3.7cm，厚さ 2.5cmの砂岩質のあら砥石で４面に使用痕がみられる。28は，長さ９cm，幅３cm，厚さ1.2cm４面とも使用されており頭部に，二本の沈線を有し黄白色を呈す泥岩質のきめのこまかいもので，Ｂ地区円形ピットから出土した携帯用砥石である。

30は，長さ８cm，幅5cm，厚さ3cmで４面に使用痕のある乳白色を呈する石英質の砥石である。29，30はＡ地区溝状遺構からの出土品である。31は，長さ17cm，幅５cmで上下両面に使用痕があり，泥板岩質の自然石を利用している。32は，長さ8.5cm，幅11.8cmで自然石の一部を欠いて面取りし，その面を砥として利用している。この石の切断面の部分に，細いものをといだような溝状の研磨痕が三条走っている。頁岩質で全面に火をうけた痕跡がみられ，ＡＩ－２の川原石の堆積物の中から出土したものである。

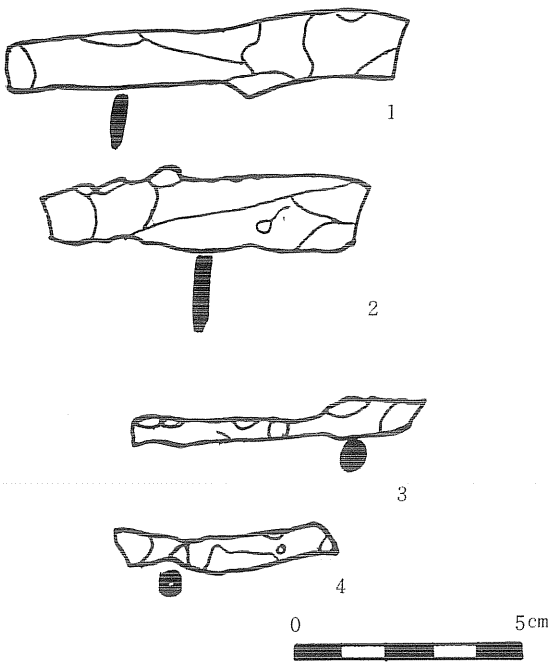
33は，高さ７cm，推定径18cmの頁岩質の石皿で，ふちと使用面との高差は 0.4cmある。34は，推定径60cm，高さ６cmの凝灰岩で，Ｅ地区のトレンチの出土品である。

③　鉄製品　（15図）

腐蝕が著しく，はっきりした器形を有するものがない。

１は，長さ 8.5cm，幅１cm，厚さ 0.2cmである。２は，長さ７cm，幅 1.5cm，厚さ 0.4cmであ

第15図　鉄製品実測図



る。この１と２は，刀子の残欠ではないかと思われる。３は，長さ 6.5cm，幅 0.4cm，厚さ 0.5cmの棒状のものである。４は，長さ4.7cm，幅 0.5cm，厚さ 0.4cmで中空のパイプ状のものである。

これらの鉄製品は，全てＡ地区からの出土品である。

6　むすび

以上，出土遺構，遺物について述べてきたが，ピットには，円形のものと方形のものが見られる。円形ピットは，径1.3m内外の小型のものと，径２m内外の大型のものとにわけられる。ピットの新旧関係を見ると，Ａ地区Ⅰ－１では，小型のピットの上に，大型のピットが検出された。このことから小型のピットが古く，大型のピットが新しいことになる。この円形ピットの周囲には，数個の柱穴が存在する。また，Ｂ地区の円形ピットと方形ピットは，個々に同一レベルに存在することから，同時期のものと思われる。ピットの周囲には，Ａ地区のピットと同様数個の柱穴が検出された。方形ピットは床面に炭が堆積し，床面とピットの壁も一面に赤褐色を呈し焼けている。現段階では用途がはっきりしないので，今後の類例を待ちたい。

この円形ピットは，数年前から調査されている能代市大館遺跡（注１）（能代営擬定地）からも検出され，調査団は倉跡でないかとしているが，筆者の知る範囲ではこれに関する文献も少なく確言できない。

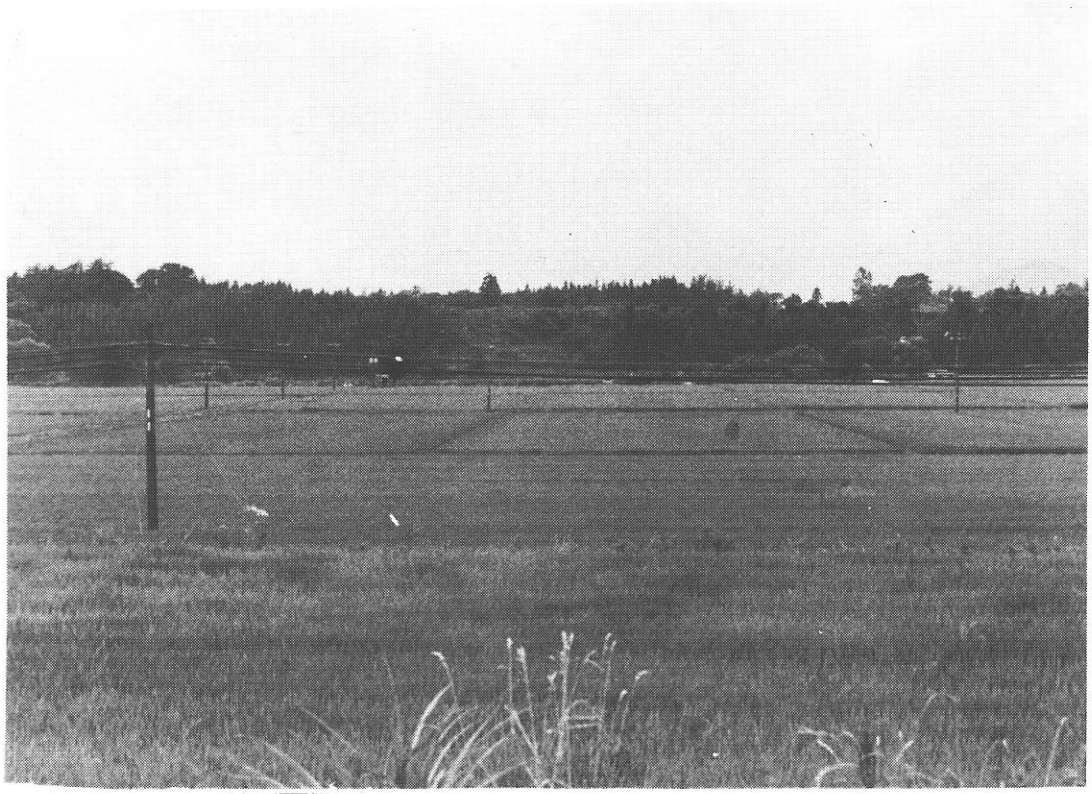
Ａ地区ピット東側の溝状遺構は，坪掘りによる確認から推定すると，沢へ続いているらしい。このことから排水溝，土地の区画，防御的施設などが考えられるがはっきりしない。ピットとの関連は，同じ基盤（黄褐色粘土）を切って構築されているので，同時期と思われる。

遺構の時代を推定する遺物として，ピット内から内黒土師器杯の破片，底部糸切りの径の小さい二次調整のない杯の破片，底部丸底長胴の土師器甕，高台内に糸切痕を持つ高台付杯などが出土している。これらのことから本遺構は平安時代の末期に近いものであると思われる。

最後に，調査と稿を草するたあたって色々と御教示くだされた，東北学院大学教授　加藤孝，東北大学助教授　坂田泉，秋田大学教授　新野直吉の諸先生と，能代市文化財保護審議会委員長で郷土史家の河田駒雄氏には厚く御礼を申しあげる次第である。

注１　大館遺跡発掘調査概報（能代営擬定地）　能代市教育委員会刊　昭和49年３月。

図版1

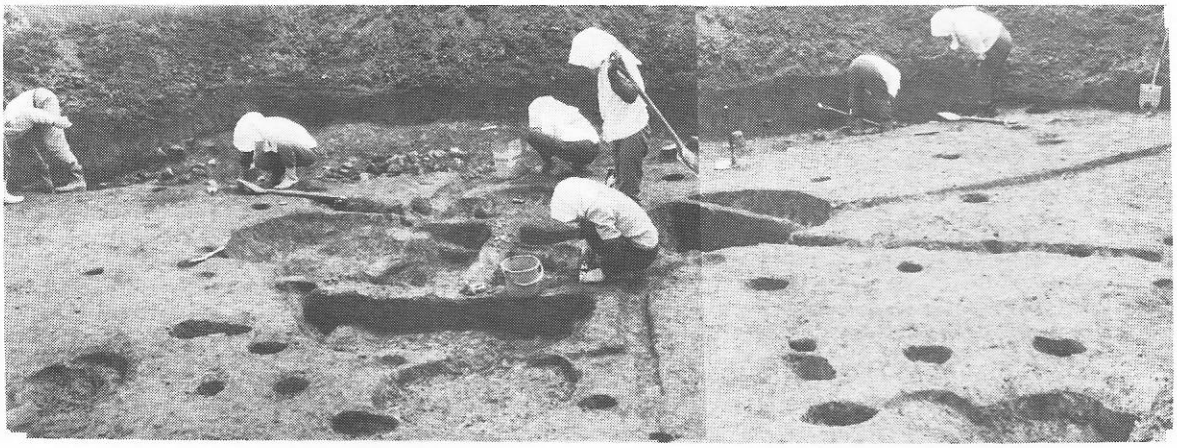


遺　跡　遠　景

段丘上の状況

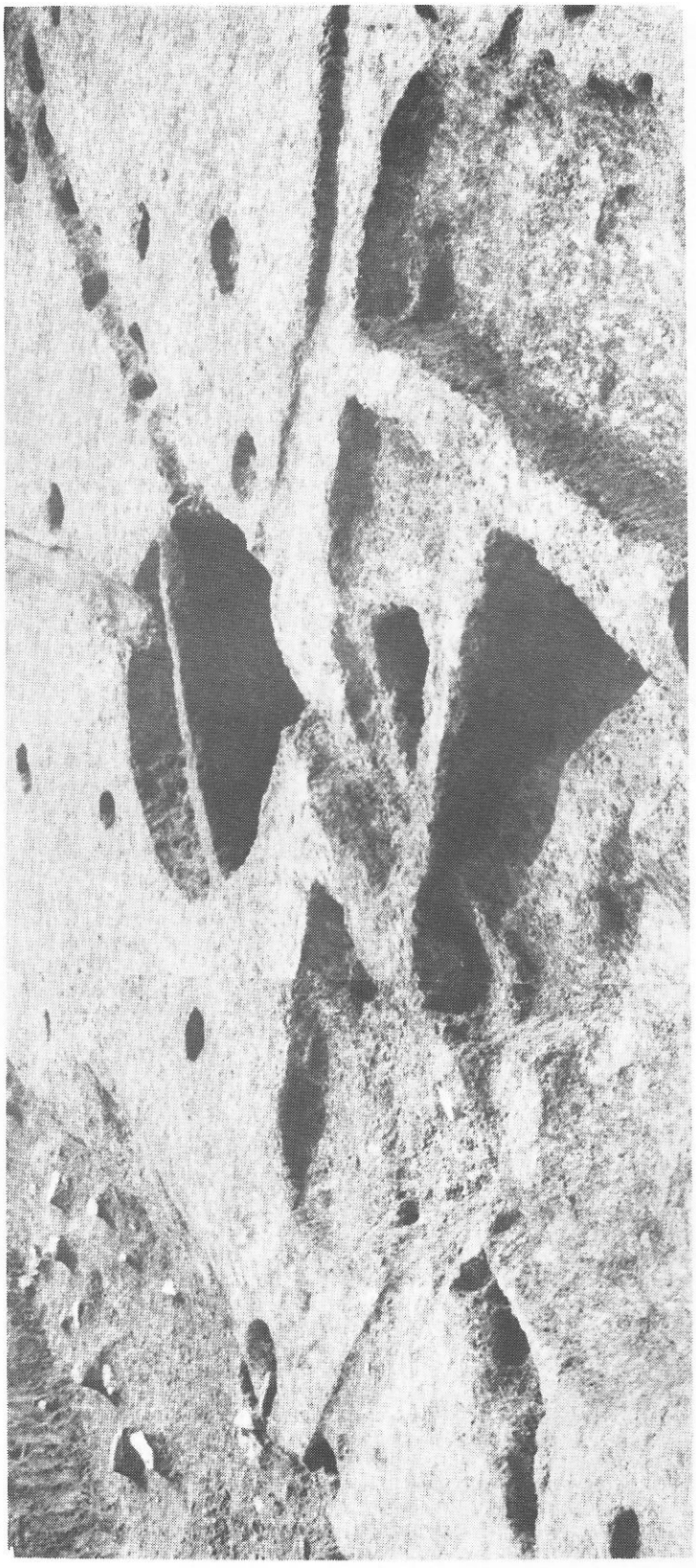
図版２

A地区の発掘前のようす



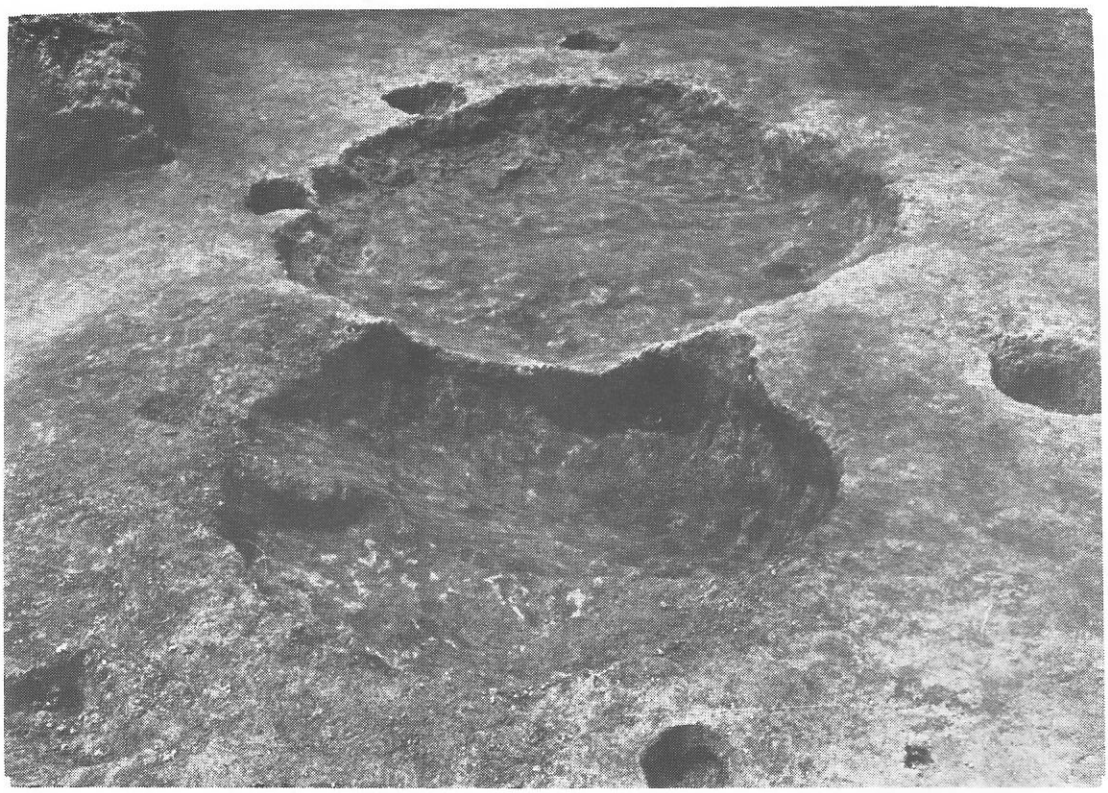
発　掘　風　景

図版3



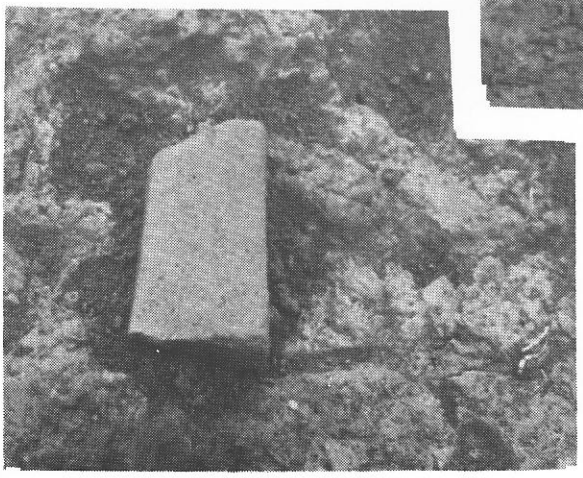
A 地区遺構

図版4



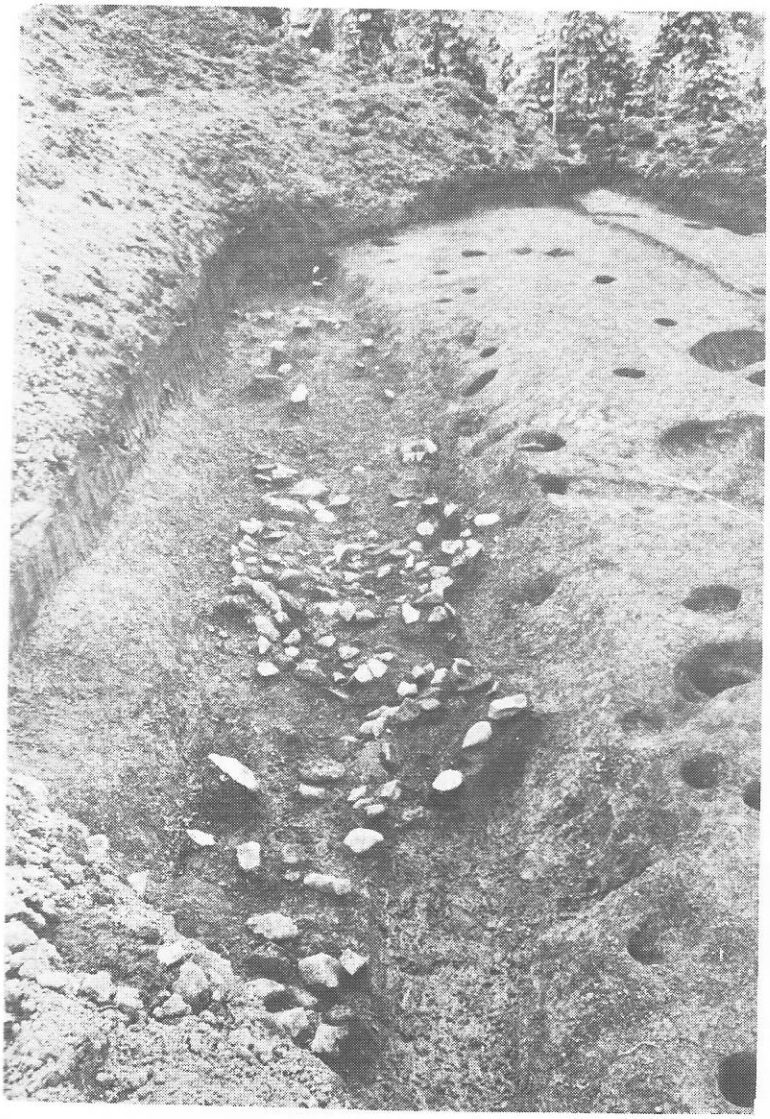
A地区遺構複合のようす

土器出土状態

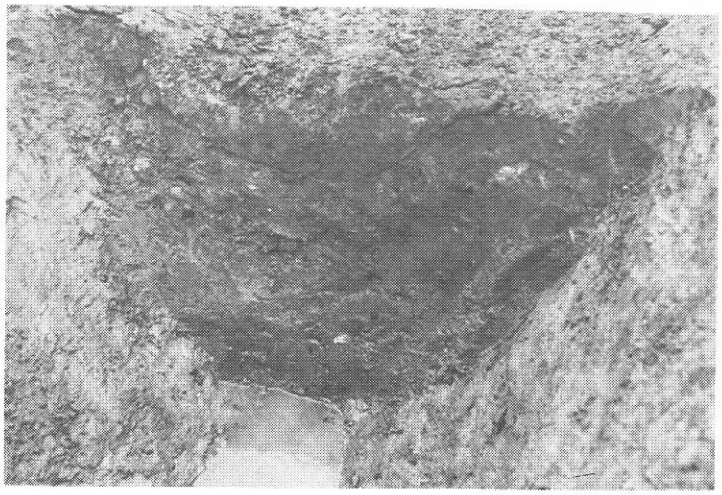


砥石出土状態

図版５

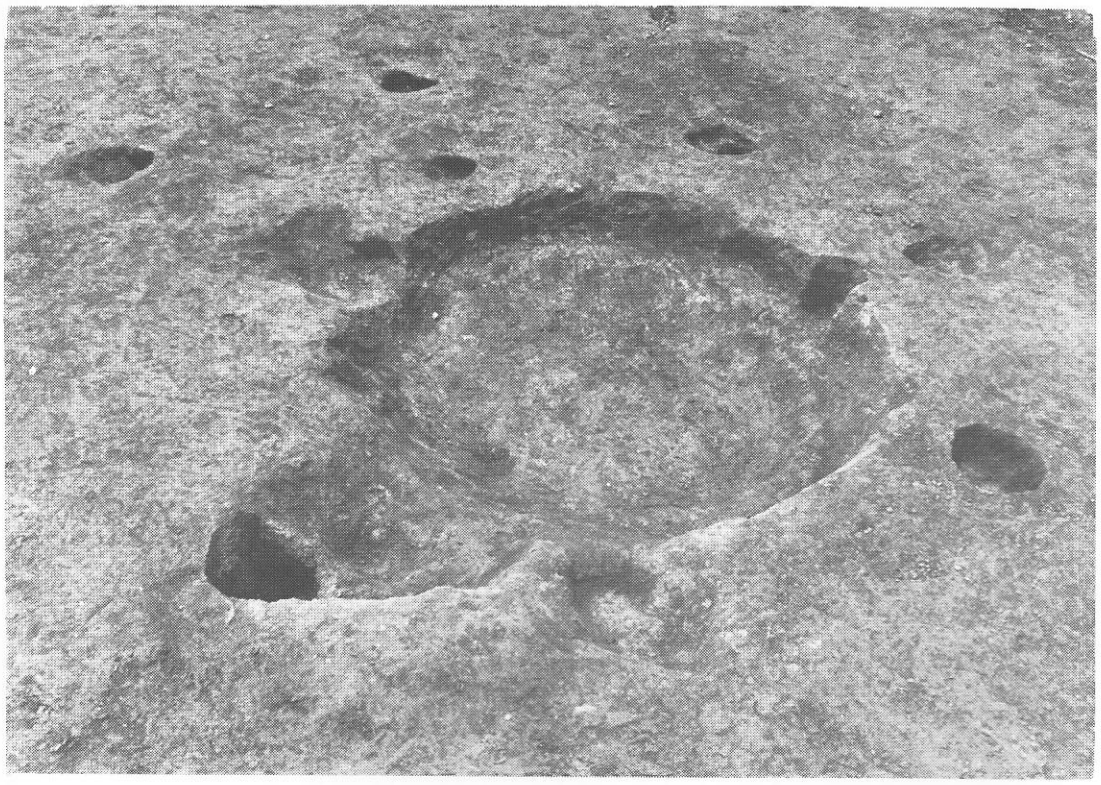


A地区溝状遺構の出土状態

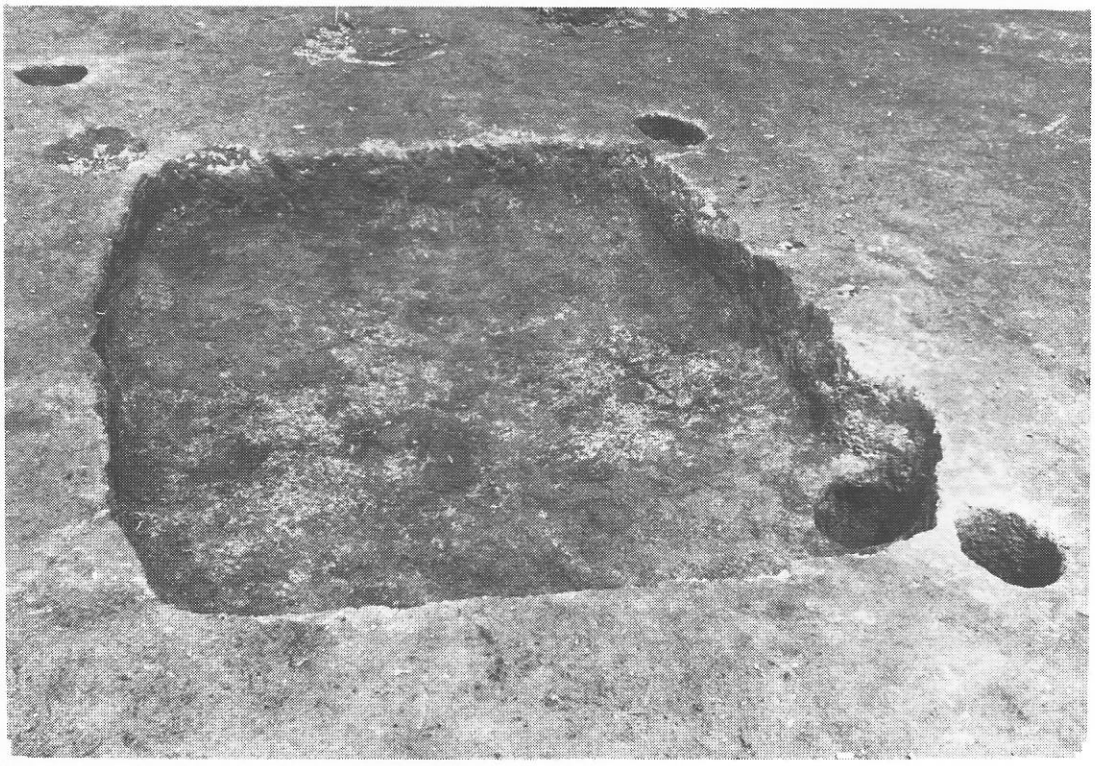


溝状遺構の断面

図版6



B地区円形ピット



B地区方形ピット

図版 7

出　土　遺　物

海老沢窯跡緊急発掘調査報告書

1　発掘調査経過

○調査に至るまでの経過

秋田県南秋田郡若美町の海老沢の地に窯跡の存在することが知られたのは，昭和30年に同町福米沢部落から八ツ面部落に到る農道工事を行った際，海老沢の斜面の所から焼土と多量の須恵器片が出土したことによる。

その後窯跡は秋田県遺跡地名表(注1)に「海老沢窯跡」として登記され，男鹿市脇本の埋没家屋(注2)に関連を持つ東北北半の数少ない窯跡として注目されてきたが，その構築の状態は不明であった。

しかるに，昭和49年４月になり，県の畑地帯総合土地改良事業による再度の農道工事で破壊される恐れが出てきたため，県の依頼により，別記のような調査団を編成し，４月27日より緊急発掘調査を行なったのである。

○調査の構成

期　　日　昭和49年４月27日，28日，29日，５月５日，６日，７日。

調査主体　秋田県教育委員会。

南秋田郡若美町教育委員会。

調　査　員　由利郡東由利町立玉米小学校教諭　伊藤種秋　（日本考古学協会員）

秋田市立高清水小学校教諭　岩見誠夫　（日本考古学協会員）

山本郡山本町立森岳小学校教諭　永瀬福男　（日本考古学協会員）

調査補助員　本荘市立北中学校教諭　佐々木隆　（秋大史学会員）

山本郡峰浜村水沢　阿部清文　（秋田考古学協会員）

調査協力　秋田県文化財専門委員　小野正人

秋田市教育委員会，秋田城跡調査事務所主事　小松正夫

同　調査補佐員　日野久

秋田県教育委員会文化課博物館準備室主事　庄内昭男

能代市教育委員会　川村正

秋田市土崎港大民石油株式会社社員　栗谷茂雄

南秋田郡若美町郷土史研究グループ

○発掘調査経過

発掘調査は，農道の拡張部にあたる道路西側上部の山林に，道路に沿ってトレンチを入れて実

施した。

4月27日（土）晴

午後1時30分，永瀬，阿部，岩見，若美町教育委員会西方文太郎氏，同町郷土史研究グループの大渕三郎氏でもって，灰原，窯体確認のため，道路の切通しの面の草木の苅払いを行なう。

この際，遺跡巡見にみえた秋田城跡調査事務所の小松正夫氏から，調査について助言をいただく。永瀬，小松両氏で，一号窯跡を調査す。

4月28日（日）晴

伊藤，永瀬，阿部，岩見でトレンチを設定し，発掘を行なう。トレンチ中程にて，木炭，須恵器片，焼土を含む灰原を検出する。ボーリングによって窯体を確認し，2号窯跡と命名するが，窯跡は道路拡張区域外に存在するため，発掘調査はせず。

午後，県文化課門間光夫学芸主事来跡し，発掘の指導に当る。

2号窯跡より6mほど南の地点の松の木の根の下より，スサ入り粘土が検出され，窯体を発見す。これを3号窯跡と命名す。

4月29日（日）晴

前日確認の3号窯跡を調査するため，トレンチを斜面上部に延長し，表土をとり除く。現場は松林のため木の根が多く，作業は難行。

午後，伊藤，佐々木，三角点より標高を移す。

5月5日（日）晴

県文化財専門委員小野正人氏，県文化課門間光夫学芸主事の指導と大民石油株式会社勤務の栗谷茂雄氏の助力を得て，窯体上部の粘土除去を行なう。またこの作業と併行してトレンチを南方に延長し，同種遺構の存在を確かめる。その結果，3号窯跡の南5mほどの所に山道のために焼成部の破壊された4号窯跡を確認する。

5月6日（月）晴

秋田城跡調査事務所の小松，日野両氏と，県文化課博物館準備室の庄内氏が調査に参加し，3号窯跡の発掘にとりかかる。午後，能代市教育委員会の川村氏調査に参加す。

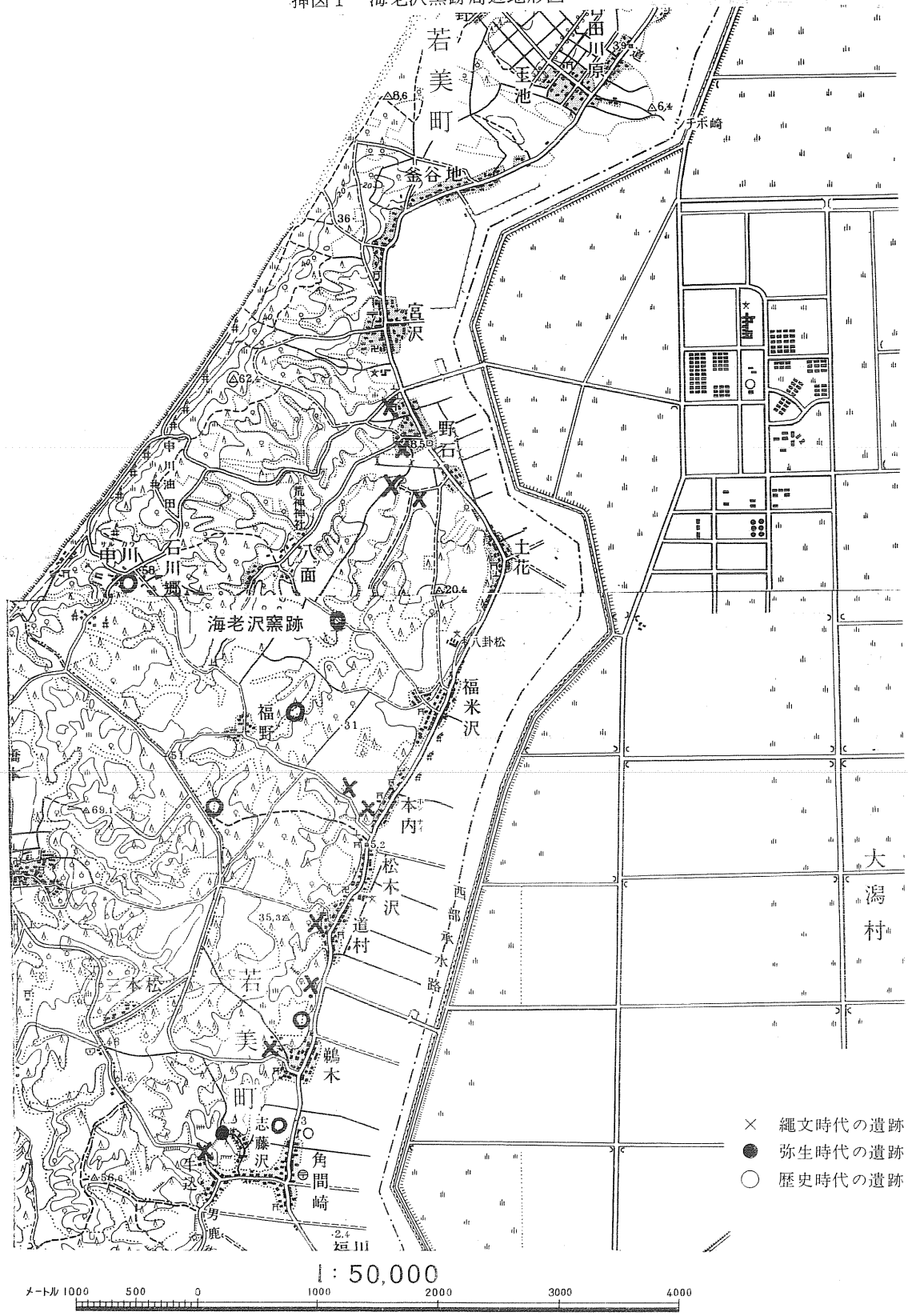
窯は天井の落下した半地下式無階無段登窯で，杯，碗，甕，壺の破片が多量に出土した。

午後若美町渡部町長来跡。3号窯跡の実測と4号窯跡の発掘を行なう。

5月7日（火）晴

永瀬，阿部，岩見，若美町教育委員会，西方，小関川，笹川氏で4号窯跡の発掘と実測を行ない，午後5時作業を終了する。

挿図１　海老沢窯跡周辺地形図



2　海老沢窯跡付近の地形と現状

海老沢窯跡は行政区として，秋田県南秋田郡若美町野石字中李台にあり，秋田県遺跡地名表には遺跡番号[注3] 464番として登記されている。

若美町は以前に琴浜村と呼称し，八郎潟を作り，国定公園として景観を誇る男鹿島[注4]を半島化させた北西砂州の南半分と，半島基部との間を占めている南北に細長い町である。

町の地形は南から順次標高を減ずるほぼ三段の段丘から形成されている。その最高位は男鹿市脇本の寒風山麓から北に伸びる40m段丘で，次いで鵜木地区から湖岸に沿って北に広がる20m段丘があり，福米沢部落以北には，より低位の10mの段丘が発達している。そして宮沢，申川を結ぶ線以北の地域は，砂丘地となっている。

段丘東縁下の湖岸には狭長な沖積地の水田が続いており，町の集落はこの段丘縁下に点在している。

窯跡の存在する海老沢は，内陸部の福野部落の付近から20m段丘を割って北に走り，野石部落の南で合流し，八郎潟に没する２本の沢の東側を指し呼ぶもので，窯跡は沢の東に面した標高18mの斜面にある。沢の中央には小川が流れ，ほとんど水田化されている。

この窯跡の存在する20m段丘は，基盤を第３紀の脇本層に置き，砂，礫が主体を成す潟西層を経て，その上位に１～２ｍほどの厚さを有する地山の粘土質火山灰土層が堆積している。

段丘上面は平坦で，畑，果樹園，松，杉の林となっている。これ等の段丘縁には挿図１に示すとおり，縄文，弥生[注5]，歴史時代各期の遺跡が数多く存在している。

3　窯の構造

発掘調査を実施して確認した窯跡は４基ある。そのうち３基は５ｍ前後の間隔で構築されており，窯跡のあり方としては，群存在と考えてよいと思われる。

１号窯跡

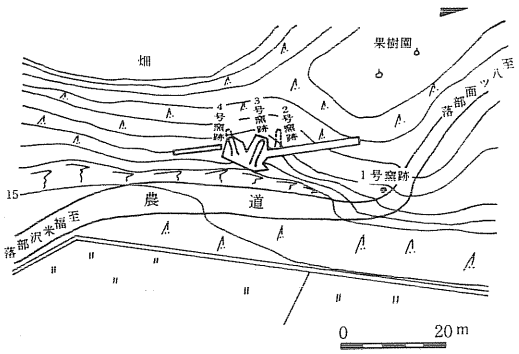
農道直上の切り倒された松の木の根にわずかに残存していたスサ入り粘土で確認したもので，窯尻の一部と考えられる。

スサ入り粘土の厚さは５～６cmで，一辺25cmほどの菱形を成し，底部ヘラ切りの須恵器杯の破片が存在した。残存していたスサ入り粘土の周囲の地山は，赤褐色に焼けていた。

２号窯跡

トレンチ発掘をしている際に，灰原によって確認したものである。窯体は工事予定地外の斜面に埋没しているため発掘はしなかった。トレンチ内の灰原からは，甕の破片が出土した。

挿図２　海老沢窯跡全体図



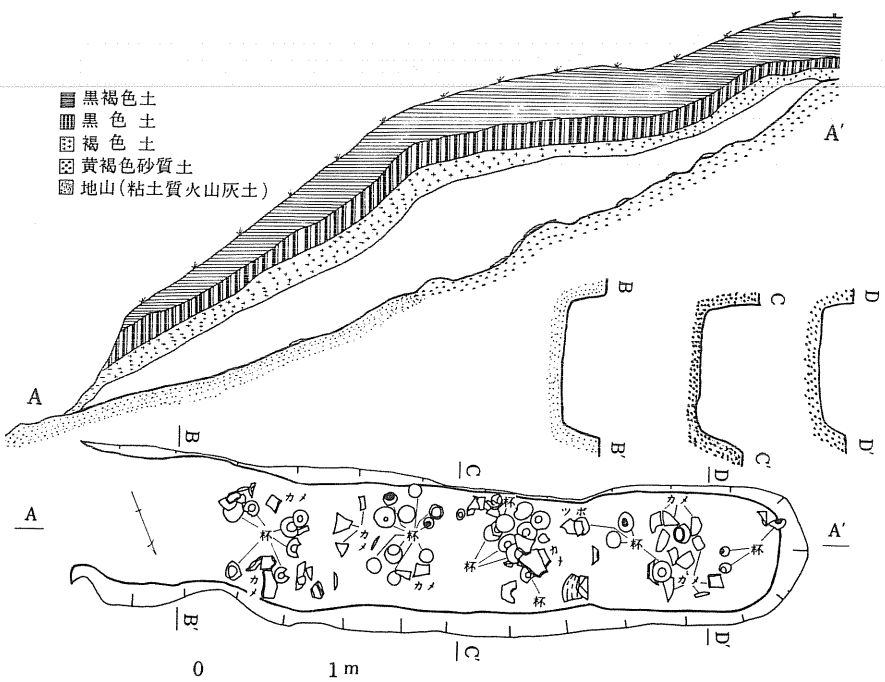
３号窯跡

２号窯跡の焚口に当たると推定される位置から，南に５ｍ90cm離れて存在するもので，焚口部は大きな松の木の根の下になっていた。焚口部のすぐ手前の前庭部は，かっての農道工事によって殆んど削り取られていた。

窯は地山の粘土質火山灰土層と，その下の潟西砂層を50cmほど掘りくぼめて作った，半地下式無階無段登窯で，全長５ｍ40cmあり，90cmの燃焼部と４ｍ50cmの焼成部に分かれる。窯の幅は焚口部で86cmあり，焼成部の中央で85cm，窯尻より40cmの所で80cmある。その平面形は，焼成部の右壁の前部にふくらみを持つもので，窯尻は円弧をえがいている。

焚口部分は，粘土を貼って作られ，その奥50cmのあたりから焼成部の中央にかけては地

挿図３　３号窯跡実測図



山の粘土質火山灰土，そこから窯尻にかけては地山下の潟西層最上部の黄褐色砂質土を掘りくぼめて窯体を作っている。この掘りくぼめた部分の両壁には，厚さ３～８cmのスサ入り粘土を貼り付けていたが，窯底にはこれが見られず，青色の砂が敷かれていた。また，焼成部両壁は青色を呈し壁のスサ入り粘土の一部にはガラス状の物質が付着していた。

天井部は落下して存在しなかったが，残存物からほぼ10cm前後のスサ入り粘土を貼り付けていたと考えられる。

また燃焼部と焼成部の境には，傾斜変換点は見られず，窯底は平均斜度24°で登っており，その主軸はＳ—68°—Ｅであった。この窯跡の焼成部には４個所に甕，壺の破片が器の表面の湾曲部を上にして窯底に喰い込んだ状態で存在した。これらの破片は粘土ブロックや数片が固着しているものが多く，その上や周囲から底部ヘラ切りと糸切りの杯，皿，碗が単独で，または重ね焼きの状態で出土したが，いずれもゆがみ，亀裂，焼きぶくれや，一部破損したものであった。この甕，壺の破片は出土状態から，焼台として使用されたものと考えられる。

４号窯跡

３号窯跡より３ｍ70cm南のやや高い所にある窯跡で，その高差は３号窯跡と燃焼部で41cmあった。焼成部の前部を逆台形に山道が横断しているため，燃焼部から焼成部に移行する部分の側壁と窯底の一部が破壊されていた。

その平面プランは３号窯跡と同じく，焼成部の燃焼部に近い右壁の部分にふくらみを有するもので発掘部分は２ｍ95cmあった。焼成部の後半分は太い松の木の下になっていたため，発掘調査はできなかったが，ボーリング調査によると発掘部分よりなお２ｍ50cmほどの奥行きを持っており，その全長は３号窯跡と同じ程度と思われる。

幅は焚口部で82cm，焼成部のふくらみの部分で１ｍ３cm，窯の両壁は５cm前後のスサ入り粘土を貼り付け，窯底には３号窯跡と同じく青色の砂が敷かれていた。焚口部は火入れが多かったらしく赤褐色にかたく焼けていた。

出土遺物は，底部を上に伏せるように置かれた糸切り底，ヘラ切り底の杯，碗，土器の表面である湾曲部を上にして窯底に置かれていた甕の破片である。

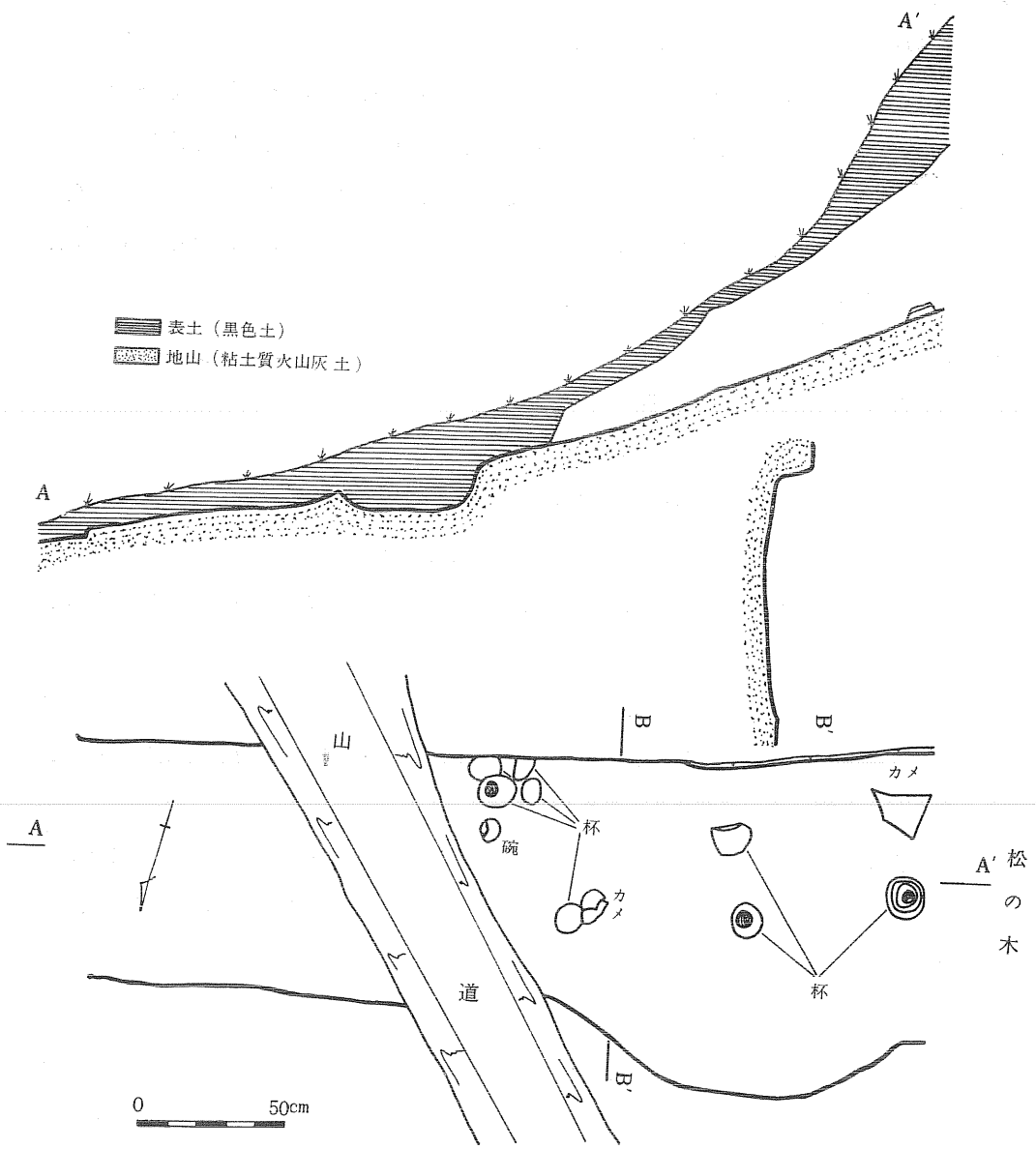
発掘部分の窯の平均斜度は18°で，その主軸の方位はＮ—76°—Ｅと３号窯跡とは異なっていた。これは窯の構築斜面が違うためである。

４　出　土　遺　物

３号窯跡出土土器（挿図５，６，図版７～15）

３号窯跡の出土遺物は，杯，皿，碗，壺，甕などであった。数的には杯，皿が多い。碗，壺，

挿図4　4号窯跡実測図



甕はすべて破片であり，その一端は窯底につきささった状態で検出された。このことから，碗，壺，甕の破片は，焼台として使用されたものと考えられる。

また，杯，皿の大部分は，器形がゆがんだり，亀裂が入っていたり，焼きぶくれしたりしていた。

杯（1～42）

底部の切り離し技法の相違によって二大別（A，B）した。A，Bとも器形の違い，調整の有無などにより，若干のバリエーションがみられる。ロクロ廻転はすべて右回りである。

A類（1～17）

底部の切り離しをヘラ切り技法による類である。

1～7は，底部とその周縁を指（布）で，丸く調整しているため，底部と胴部の区別が不可能である。口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。色調は青灰色で，焼成は良好である。

8～17は，底部と胴部の区別が可能であるが，底部周縁は部分的に調整されている。17は底部がわずかに外に出ていて，3号窯では特例である。口縁部は8，17を除いて外反する。口縁端部は丸くおさめる。色調は青灰色を呈するが，7，14，17は黄褐色である。

B類（18～42）

底部の切り離しは，糸切り技法による類である。

18～25は，器高が約 4.5cmで他の杯より高い。25は底部周縁を調整しているが，18～24は切りっぱなしである。胴部内外面とも，ロクロ成形のための凹凸が顕著である。口縁部は外反しない。口縁端部は丸くおさめる。色調は青灰色を呈し，焼成が良好である。

26～28は，口径約13.5cmと大きく，口縁部が外反する。底部周縁を軽く調整している。色調は青灰色で，焼成は良好である。

29～34は底径が約 5.5cmと小さく，口縁部は外反しない。底部は切りっぱなしが多いが，32だけは軽く周縁を調整している。口縁端部は丸くおさめている。内外面とも，ロクロ成形の凹凸がはっきりしない。色調はすべて黄褐色を呈する。

35～42も底径約 5.5cmと小さいが，口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。底部は切りっぱなしで，調整は認められない。40は内面をはけ状工具で調整している。色調は青灰色で，焼成は良好である。

皿（43～50）

高台付きの皿である。高台は環状の張り付け高台で，わずかに外方にふんばる。高台端部は丸く仕上げている。口縁部はやや下方に向く。端部は薄く仕上げている。高台内には糸切り痕がみえる。青灰色を呈し，焼成も良好である。49，50は小型である。45の内面には，重ね焼きの痕跡がある。

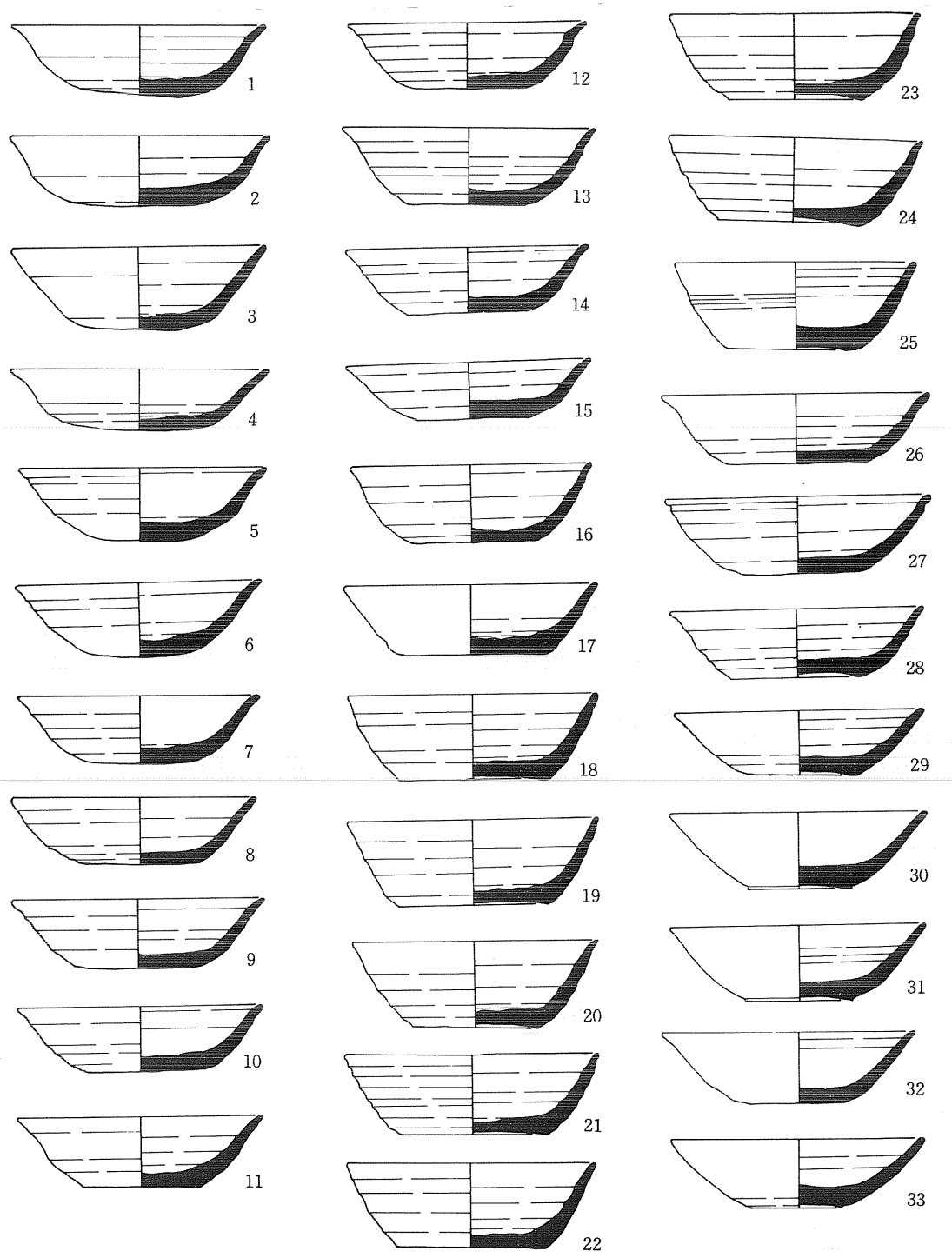
碗（51，52）

高台の有無によってA，Bに分類した。

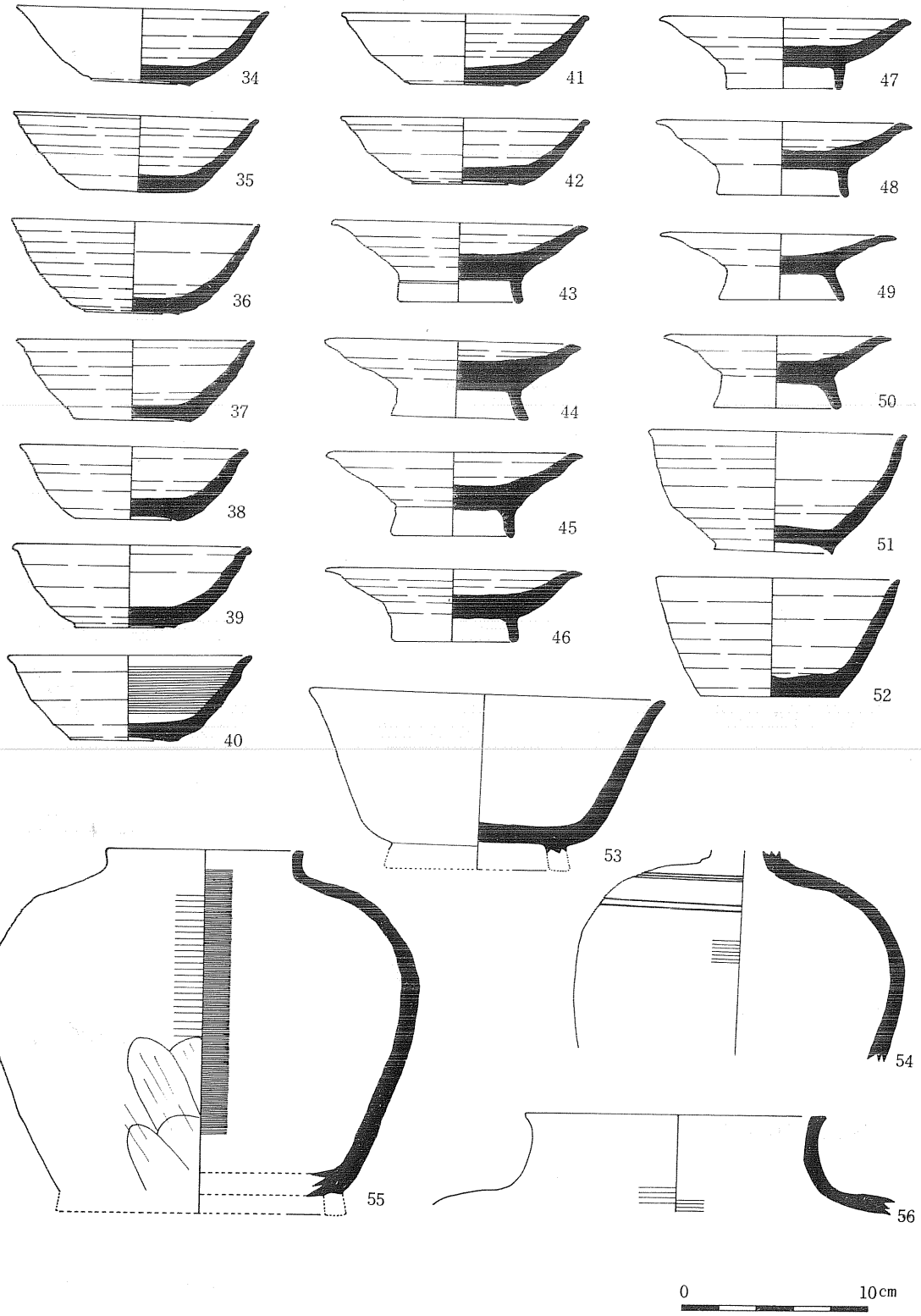
A類（51）

底部を糸で切り離した後，断面三角形のひくい高台を作り出している。胴部がふくらみ，口縁

挿図５　３号窯跡出土土器実測図



挿図6　3号窯跡出土土器実測図



部は外反する。ロクロ成形による凹凸が顕著である。器肉はうすい。色調は青灰色を呈し，焼成は良好である。高台内には糸切り痕がみえる。

B類（52）

底部は糸での切りっぱなしで，高台を持たない。口縁部は外反しない。口縁端部はうすくおさめている。ロクロ成形のための凹凸が顕著である。焼成は良好で，色調は青灰色を呈する。内部に重ね焼きの痕跡を残している。

大碗（53）

口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸くおさめる。内部に重ね焼きされた大碗の底部が溶着していたが，外方にふんばる厚手の高台が張り付けされるようである。

壺（54，55）

口径の大小によって，A，Bに分類した。

A類（54）

頸部は細く直立するようである。口縁部の形態は不明である。頸部と体部の接合は一段構成である。最大径は胴部上半にあり，約17.5cmを測る。肩部には数条の凹線をめぐらしている。胴部上半には，はけ状工具による調整が認められる。底部の形態は不明である。

B類（55）

口径約10cmであり，頸部は短く，直立している。また，頸部の器肉は薄手に作られ，口縁端部は丸くおさめている。胴部上半は，はけ状工具で調整され，下半はヘラ状工具で粗く削られている。底部には，わずかに外方にふんばる高台が張り付けられるようである。

甕（56）

頸部は外反しながらたちあがる。口縁端部は平らに仕上げられている。内外面とも，はけ状工具でていねいに調整している。色調は黄褐色を呈する。

3号窯跡天井部上から出土した杯（挿図7，図版16）

3号窯跡天井部の上から出土したもので，3号窯跡の製品であるかどうか不明である。遺物は杯のみである。底部の切り離し技法の相違によって，A，Bに分類した。ロクロ廻転はすべて右回りである。

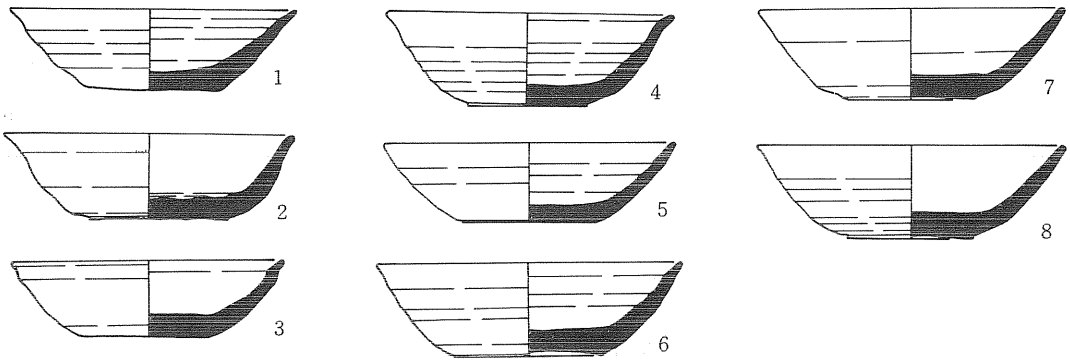
A類（1，2）

底部の切り離しはヘラ切りによる。底部周縁を部分的に調整している。口縁部は外反し，口縁端部は丸くおさめている。色調は青灰色を呈し，焼成は良好である。

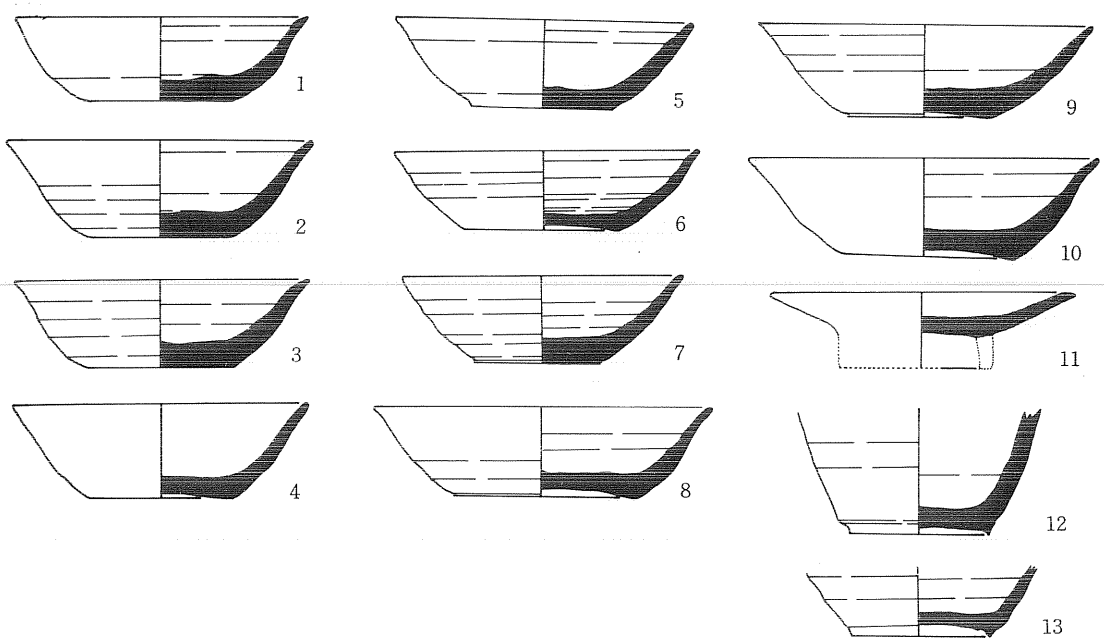
B類（3～8）

底部の切り離しは糸切りによる。いずれも切りっぱなしである。3，4のみ口縁部が外反する。

挿図７　３号窯跡天上部の上出土土器実測図



４号窯跡出土土器実測図



口縁端部を丸くおさめている。3，4，5は焼成良好で，青灰色を呈する。6，7，8は口径，底径，器高が大きく，焼成は不良で，赤褐色を呈する。

4号窯跡出土土器（挿図7，図版17，18）

4号窯跡からは，杯，皿，碗，甕の胴部破片が出土した。甕の破片は窯底につきささって検出されたので，焼台として使用されたものと考えている。

杯（1～10）

底部の切りはなし技法の相違によって，A，Bに分類したが，A，Bそれぞれバリエーションがある。ロクロ廻転はすべて右廻りである。

A類（1～3）

底部の切り離しが，ヘラ切り技法によっている類である。底部周縁は丸く調整している。口縁部は外反し，端部は丸くおさめている。色調は1，2が青灰色，3は黄褐色を呈する。焼成はいずれも良好である。

B類（4～10）

底部の切り離しが糸切り技法による類である。5，7は切りっぱなしであるが，他は底部周縁を粗雑ながら調整している。口縁部は，4と7を除き外反する。8～10は器肉は薄いが，口径，器高，底径が大きく特徴的である。色調は，7が黄褐色，他は青灰色を呈する。焼成は良好である。

皿（11）

外方にややふんばる環状の高台を張り付けたと考えられる皿である。口縁部はわずかに下方に向き，口縁端部は薄くおさめている。底部には糸切り痕が認められる。

碗（12，13）

断面三角形の低い高台を持つ。高台は張り付けによるものと考えられるが，はっきりしない。口縁部の状態は不明である。色調は青灰色を呈し，焼成は良好である。

5　出土遺物実測数値表

出土窯跡	実測図番号	品名	口径	器高	底径または高台径	高台の高さ	備考
3号窯跡	1	杯	13.2cm	3.7cm	cm	cm	底部ヘラ切り
	2	〃	13.5	3.8			〃
	3	〃	13.8	4.3			〃
	4	〃	13.5	3.3			〃
	5	〃	13.0	3.8			〃

出土窯跡	実測図番号	品名	口径	器高	底径または高台径	高台の高さ	備考
	6	杯	13.0cm	4.0cm	cm	cm	底部ヘラ切り
	7	〃	12.7	3.6			〃
	8	〃	12.7	3.6	6.4		〃
	9	〃	13.3	3.7	6.6		〃
	10	〃	12.8	3.4	6.4		〃
	11	〃	12.8	3.7	6.2		〃
	12	〃	12.5	3.5	6.2		〃
3	13	〃	13.2	4.1	6.2		〃
	14	〃	12.7	3.4	6.5		〃
	15	〃	12.7	3.0	6.0		〃
	16	〃	12.6	4.1	6.5		〃
	17	〃	13.3	3.7	7.5		〃
	18	〃	13.0	4.5	8.0		底部糸切り
	19	〃	13.1	4.5	7.9		〃
号	20	〃	12.7	4.5	6.5		〃
	21	〃	13.3	4.2	7.8		〃
	22	〃	13.0	4.5	7.8		〃
	23	〃	13.1	4.5	7.0		〃
	24	〃	13.2	4.5	7.4		〃
	25	〃	12.6	4.6	6.6		〃
	26	〃	14.0	3.6	7.4		〃
窯	27	〃	14.0	4.0	6.4		〃
	28	〃	13.3	3.6	6.8		〃
	29	〃	13.1	3.4	6.0		〃
	30	〃	13.5	4.1	5.5		〃
	31	〃	13.4	4.6	5.7		〃
	32	〃	13.2	3.8	5.1		〃
	33	〃	13.3	3.6	4.8		〃
跡	34	〃	13.5	4.0	5.3		〃
	35	〃	13.2	4.1	6.0		〃
	36	〃	13.3	4.8	5.0		〃
	37	〃	12.8	4.3	6.2		〃
	38	〃	12.2	4.0	5.2		〃
	39	〃	13.0	4.5	5.3		〃
	40	〃	13.2	4.5	5.7		〃
	41	〃	13.3	3.8	6.0		〃

出土窯跡	実測図番号	品名	口径	器高	底径または高台径	高台の高さ	備考
3号窯跡	42	杯	13.3cm	3.5cm	6.0cm	cm	底部糸切り
	43	皿	13.7	4.2	6.7	1.2	〃
	44	〃	13.7	4.1	7.4	1.4	〃
	45	〃	13.7	4.5	6.6	1.4	〃
	46	〃	13.7	3.9	6.7	1.3	〃
	47	〃	13.5	3.8	6.3	1.2	〃
	48	〃	13.8	4.0	7.0	1.3	〃
	49	〃	12.7	3.5	6.8	1.3	〃
	50	〃	12.2	3.9	7.0	1.3	〃
	51	碗	14.0	6.4	6.4	0.5	〃
	52	〃	13.2	16.4	7.5		〃
	53	大碗	19.0				
	54						
	55	壺	10.5				
	56	甕	16.0				
3号窯跡天井部の上	1	杯	13.0	3.7	6.0		底部ヘラ切り
	2	〃	13.1	3.9	6.2		〃
	3	〃	12.3	3.0	6.0		底部糸切り
	4	〃	13.1	4.2	5.4		〃
	5	〃	13.2	3.6	6.2		〃
	6	〃	13.8	4.2	6.6		〃
	7	〃	14.0	4.1	5.8		〃
	8	〃	14.0	4.2	5.7		〃
4号窯跡	1	〃	13.2	3.8	6.7		底部ヘラ切り
	2	〃	13.7	4.3	6.7		〃
	3	〃	13.2	3.9	6.7		〃
	4	〃	13.3	4.3	6.5		底部糸切り
	5	〃	13.5	4.1	6.4		〃
	6	〃	13.8	3.6	7.2		〃
	7	〃	12.7	4.0	5.7		〃
	8	〃	15.3	4.1	8.3		〃
	9	〃	15.2	4.2	6.5		〃
	10	〃	16.0	4.5	8.0		〃
	11	皿	14.0				〃
	12	碗			6.4	0.3	〃
	13	〃			6.4	0.4	〃

6 むすび

今回の緊急発掘調査では，４基の窯跡を確認できたが，そのうち窯体の様子を知り得たものは，ほぼ完掘できた３号窯跡と，破壊はされていたが窯体の半分ほどを調査できた４号窯跡の２基である。

この２基の窯跡は，灰原の層位から考えると３号窯跡が古く，４号窯跡はこれに後続する関係にあると判断される。しかし，その窯体の構築状態と出土遺物[注６]には殆んど差はなく，ほぼ同時期に操業したものと考えられる。

県内の窯跡は，現在まで[注７]14基が調査されている。

昭和32年に奈良修介，豊島昂両氏によって調査された平鹿郡雄物川町今宿字末館[注８]Ａ地点の窯跡は半地下式の登窯であり，現存部は幅約１ｍ長さ約２ｍの焼成室の部分で，須恵器，長頸壺の破片，糸切底の杯，付け高台のある碗形の土器，径15～20cmの蓋の破片があり，その操業の時期は出土遺物から平安初期とされている。同じ末館Ｂ[注９]地点の窯跡は，昭和34年に大和久震平氏の調査によるもので，全長８ｍ50cmの大型で，出土土器は糸切底の須恵器杯，高台付杯，蓋，壺があり，数的には糸切底の杯が多く，その操業の年代は奈良末平安期とされている。

昭和39年には，大川清氏によって雄勝郡羽後町[注10]足田七窪Ｂ地点の窯跡４基が調査されている。１号窯跡は全長７ｍ40cmあって壺，甕，の破片が出土し，２号窯跡は改造の行なわれたもので，第一次のものは全長４ｍ80cm，二次は全長２ｍ80cm，重ね焼きの杯が出土しており，３号窯跡は焼成室の一部と窯尻部分の残っているもので，杯形土器が出土している。４号窯跡は全長６ｍ80cmあり，ここからは甕と壺形土器片が出土している。これら出土須恵器杯は糸切底である。この操業の年代については窯跡の形態を中心に，１，４号窯跡は９世紀の初頭から中葉へ，２号窯跡一次，二次，３号窯跡は９世紀末から10世紀にかけての年代とされている。

海老沢３号，４号窯跡は以上の窯跡と細部では異点もあるが基本的には同じ半地下式の登窯であり，出土遺物のうち須恵器杯の底部の切り離しが糸切り技法，ヘラ切り技法のものが[注11]共存していた点に特色を持つものである。

須恵器杯の底部の切り離し[注12]の技法は，ヘラ切りのものから糸切りのものへと移行し，東北地方での主な変化は[注13]９世紀の後半であると考えられている。本３号，４号窯跡では両者が伴出しているが，数的には糸切り技法によるものが多いことから，操業は９世紀の後半から10世紀に近い時期のものと考えたい。

この３号，４号窯跡出土の完形に近い須恵器の殆んどは杯，皿，碗であることから，小物を焼いたと考えられる。製品は八郎潟の舟運を利用して送り出し，その供給先は男鹿市[注14]脇本の埋没家

屋が有力である。

末筆ながら本報告をまとめるにあたり浅学の私達に対し懇切なご指導をくださった東北学院大学教授加藤孝先生，国士館大学教授大川清先生，多賀城跡調査研究所長岡田茂弘先生，また種々ご教示ご協力をいただいた秋田城跡調査事務所主事小松正夫氏，仙台育英学園高校教諭渡辺泰伸氏，能代市教育委員会川村正氏の諸氏に記してここに厚く御礼申しあげます。

注１　秋田県教育委員会　「秋田県遺跡地名表」秋田県文化財調査報告書第１集　昭和38年３月。

注２　岩見誠夫　「南秋田郡若美町海老沢出土の須恵器に関して」　秋田考古学第30号　昭和47年９月。

坂詰秀一　「東北北部における須恵器の生産」　北奥古代文化第４号　北奥古化文化研究会　昭和47年４月。

注３　注１に同じ。

注４　藤岡一男，高安泰助　「八郎潟の地質及び地形」　八郎潟の研究　秋田県教育委員会　昭和40年７月。

注５　岩見誠夫　「琴浜村内における諸遺跡」　ことはま教育　昭和39年３月。(著名なものとしては縄文時代の角間崎貝塚，弥生時代の志藤沢遺跡がある。)

注６　３号，４号窯跡から出土した須恵器杯は，岡田茂弘，桑原滋郎　「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」　宮城県多賀城跡調査研究所　研究紀要１　昭和49年３月　に論考されている第６類ｂと，第９類ａ，ｂに概当するもので，３号，４号窯跡とも両類が出土している。杯の口径と底径の比率は，Ａ類のヘラ切り技法のものが，0.46から0.56の範囲にあるが0.50前後が多い。Ｂ類の糸切り技法のものは，0.61から0.36までばらつきが大きいが0.30台は３例のみで，他は 0.40台と0.50台 が半々である。

注７　上法香苗　「秋田市上新城の古代窯址群について」　秋田考古学第８号　昭和32年。

武藤鉄城　「秋田県仙北郡九十九沢窯跡」　考古学年報２　昭和29年。

豊島昂　「調査略報三項」　秋田考古学第10号　昭和33年。

大和久震平　「平鹿郡雄物川町末館窯跡発掘調査報告」　雄物川町郷土資料第三集，雄物川町文化財委員会　昭和38年７月。

大川清　「足田遺跡発掘調査概報―七窪Ｂ地区」　秋田県文化財調査報告書第10集　秋田県教育委員会　昭和42年３月。

奈良修介，豊島昂　「秋田県の考古学」　吉川弘文館　昭和42年１月。

南秋田郡若美町海老沢窯跡　昭和49年４～５月調査。

横手市物見台窯跡　昭和49年８月横手市教育委員会調査。

秋田市手形山窯跡　昭和49年９月秋田考古学協会調査。

注８　注７に同じ。

注９　注７に同じ。

注10　注７に同じ。

注11　秋田考古学協会による昭和49年９月調査の手形山窯跡も，ヘラ切り，糸切り技法による杯を出土している。私達の知見では両技法の存在する窯跡は現在の所この２例のみである。

注12　阿部義平　「ロクロ技術の復元」　考古学研究第18巻２号　考古学研究会　昭和46年９月。

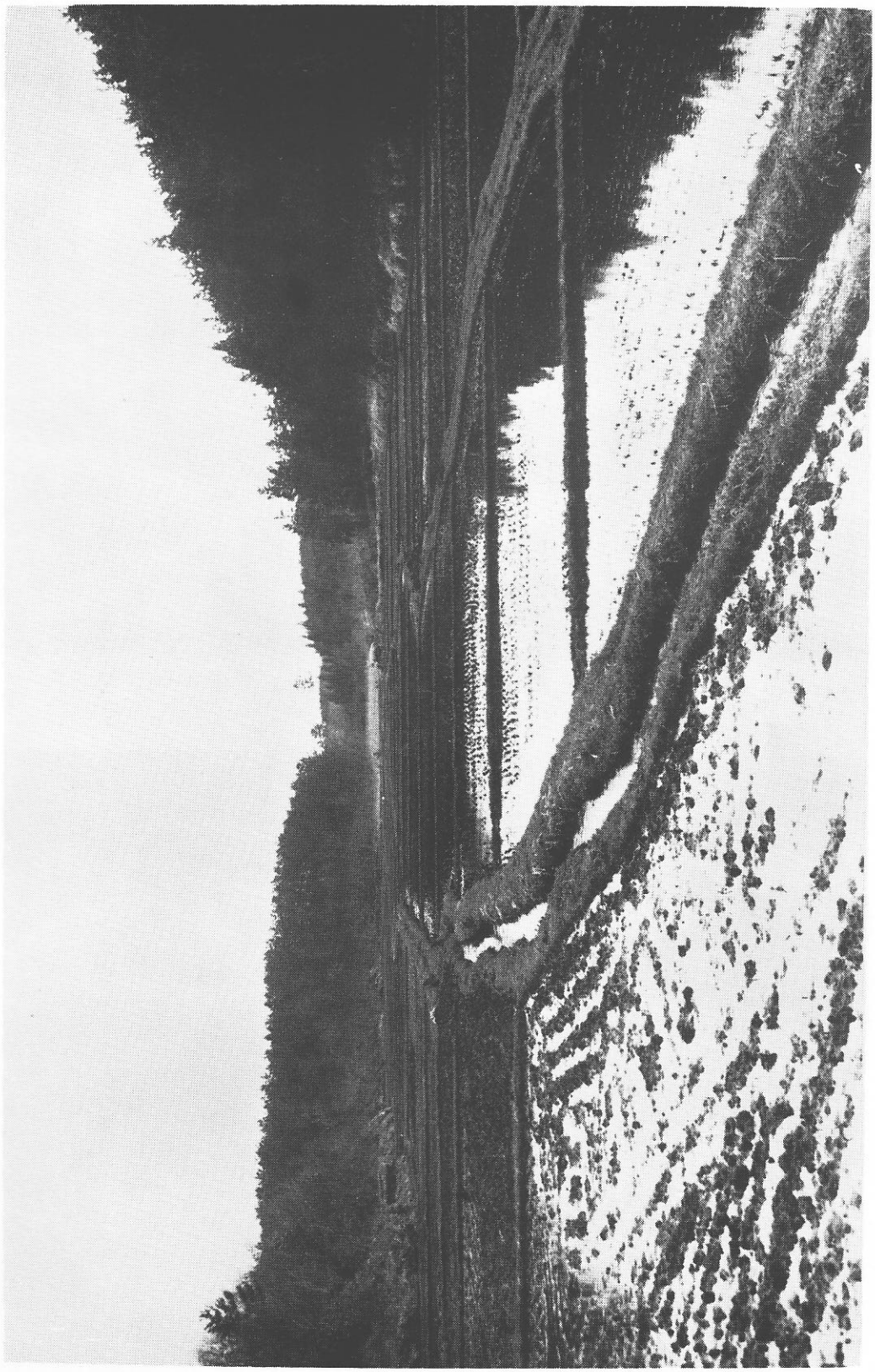
注13　工藤雅樹，桑原滋郎　「東北地方における古代土器生産の展開」　考古学雑誌第57巻３号。

岡田茂弘，桑原滋郎　「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」　宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要１　昭和49年３月。

注14　秋田県教育委員会　「脇本埋没家屋第三次調査概報」　昭和42年３月。

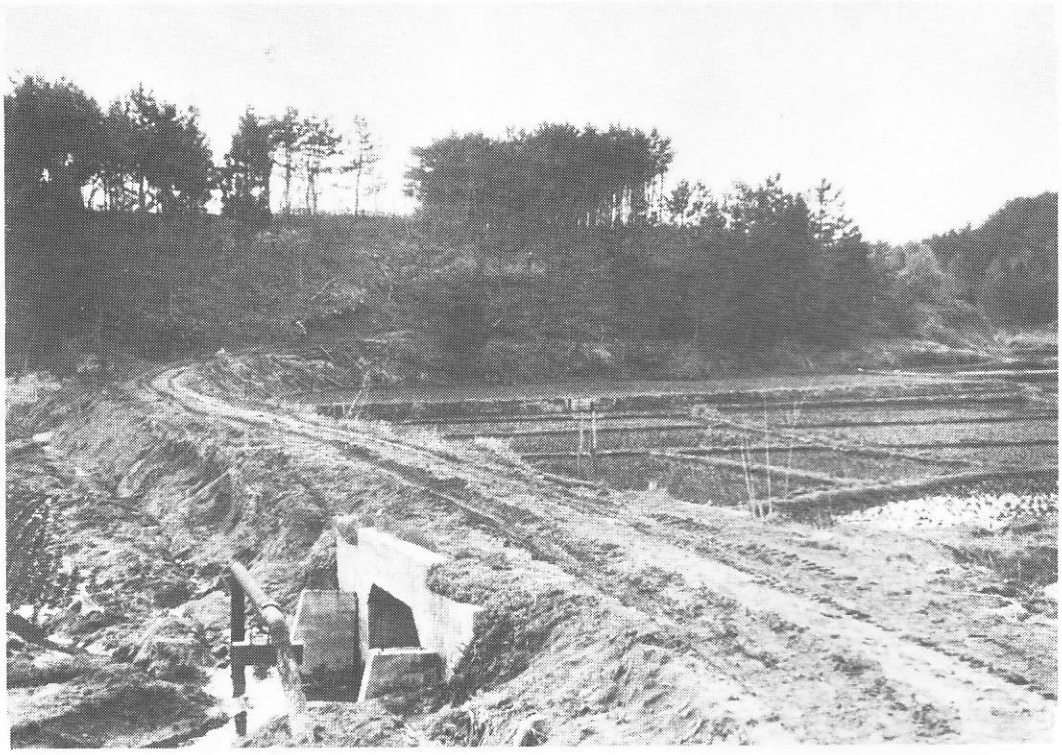
八郎潟の舟運を利用して製品を運搬するのであれば，その供給先は八郎潟の対岸にある南秋田郡五城目町の石崎遺跡（推定秋田郡衙跡）も考慮すべきである。しかし，永瀬，岩見の実見によると出土須恵器の中には海老沢窯跡の製品は見当らなかった。

図版1



海老沢のようす

図版２

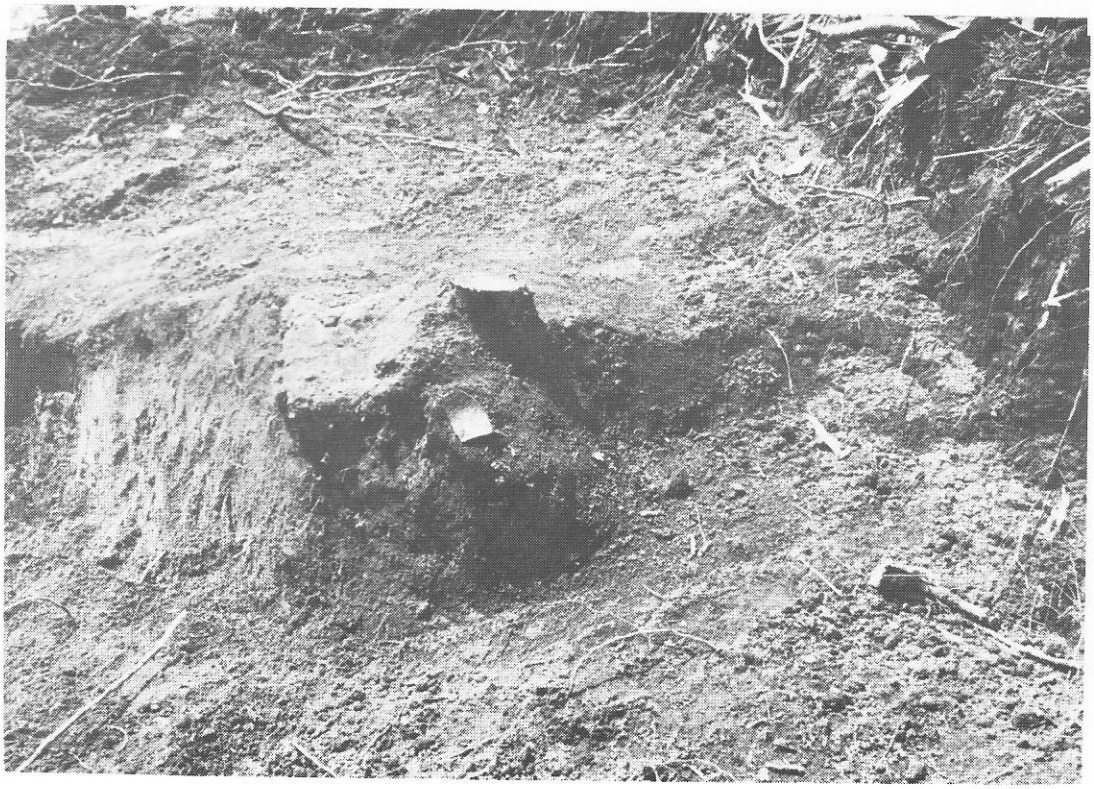


窯　跡　遠　景

発　掘　風　景

図版３

３号窯跡発掘風景

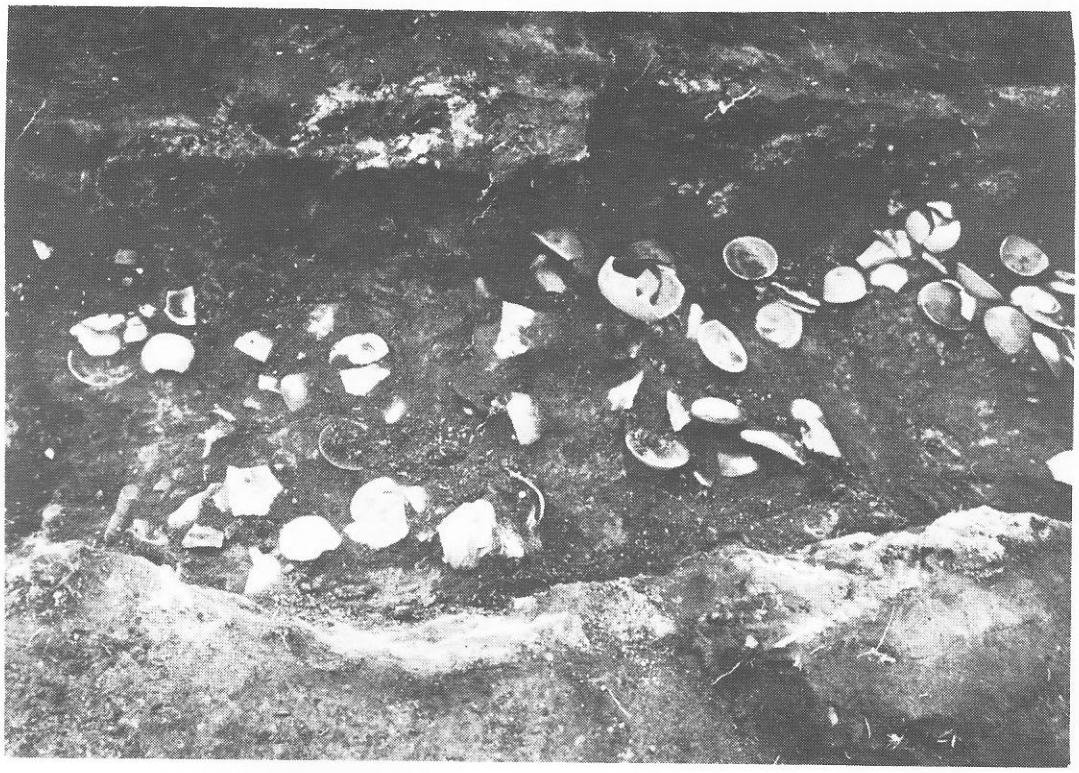


１　号　窯　跡

図版 4

3　号　窯　跡

図版5



3号窯跡土器出土状態

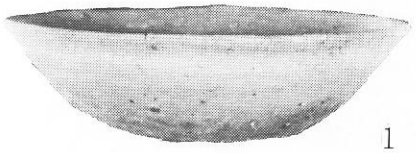
3号窯跡土器出土状態

図版6　　4　号　窯　跡

土　器　出　土　状　態

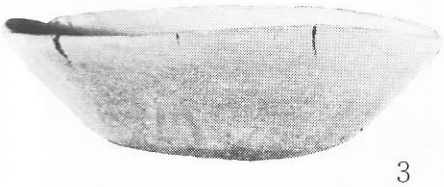
図版7

3号窯跡出土土器

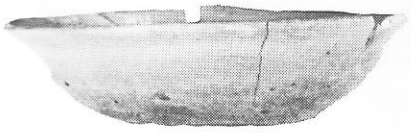


1

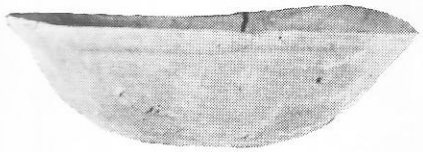
2



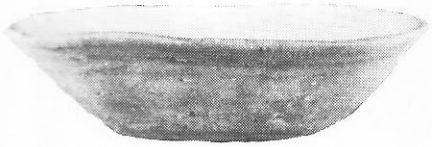
3



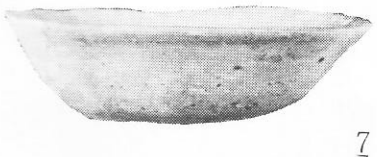
4



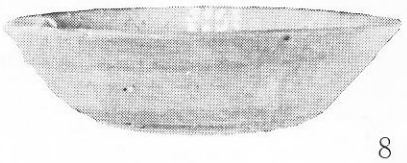
5



6



7

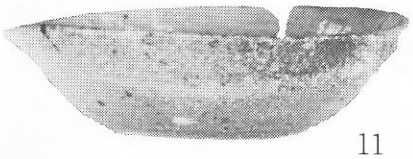


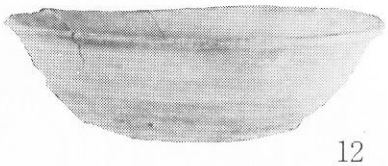
8

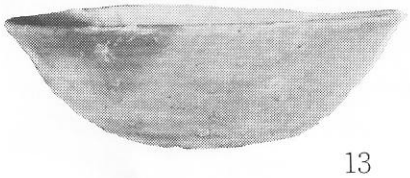
9

10

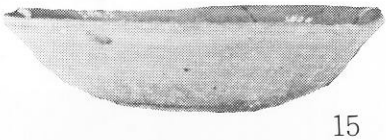
図版8　　3号窯跡出土土器

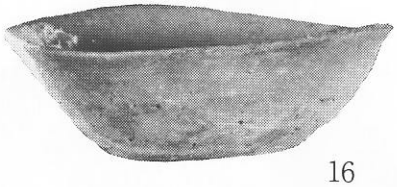

11

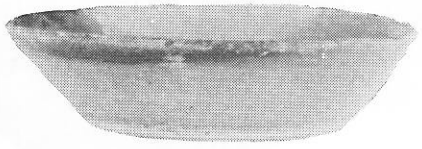

12

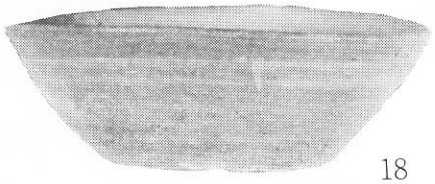

13

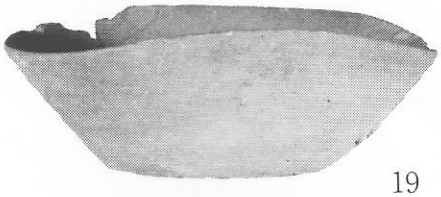
14


15

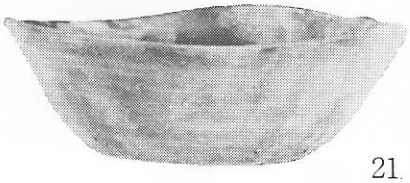

16


17

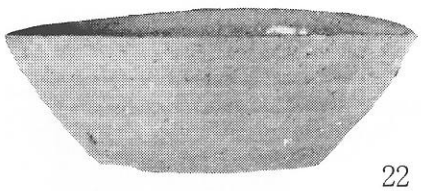

18


19

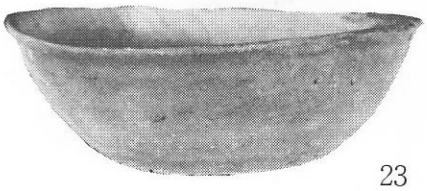
20


21

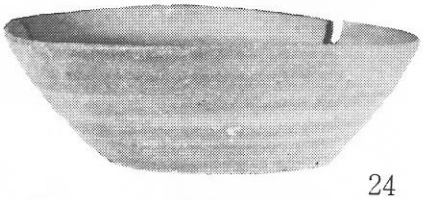
図版9　　3号窯跡出土土器



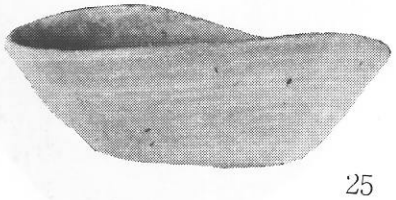
22



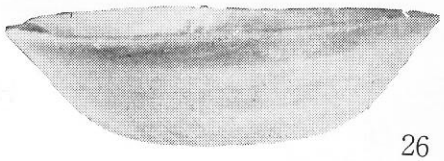
23



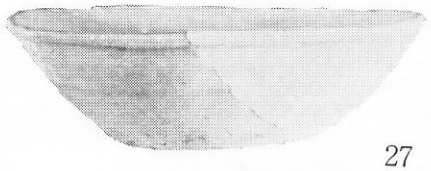
24



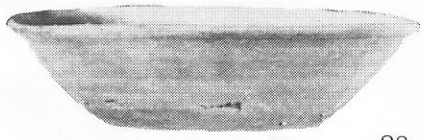
25



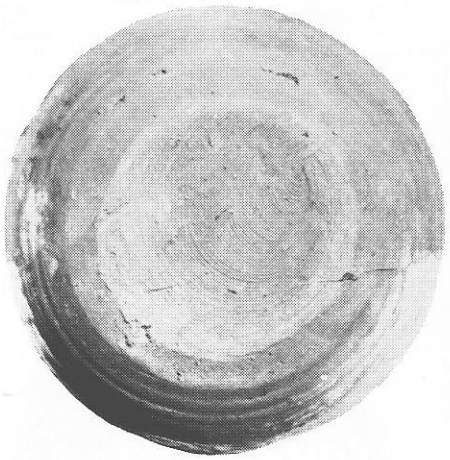
26

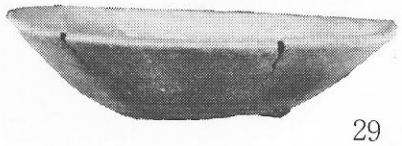


27



28

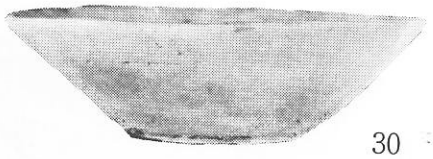




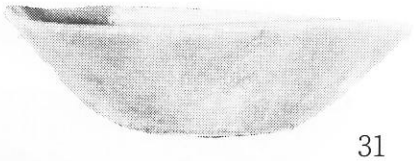
29

図版10

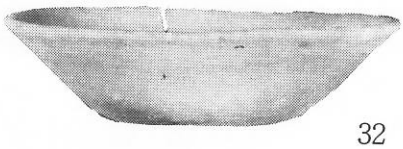
3 号窯跡出土土器



30



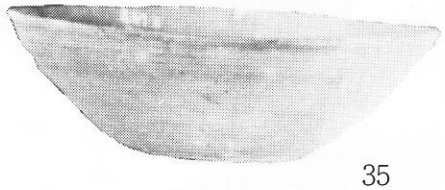
31



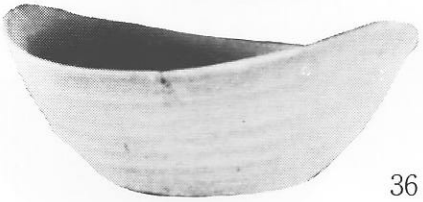
32

33

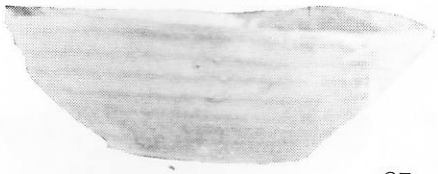
34



35



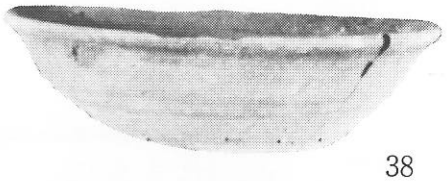
36



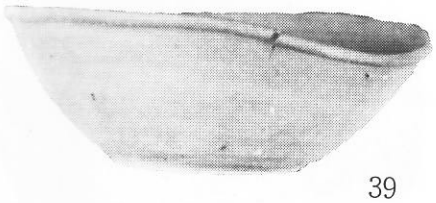
37

図版11

3 号窯跡出土土器



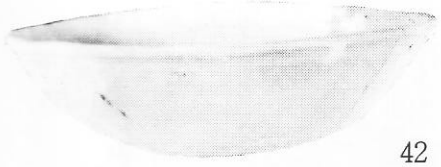
38



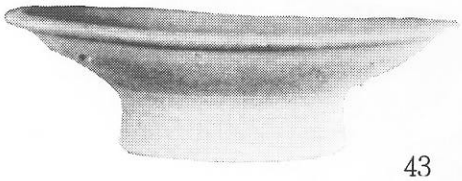
39

40

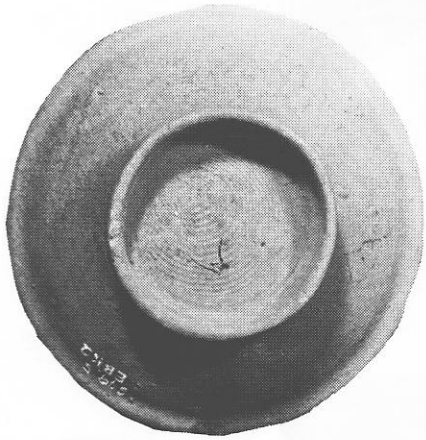
41

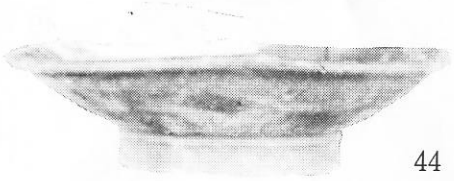


42

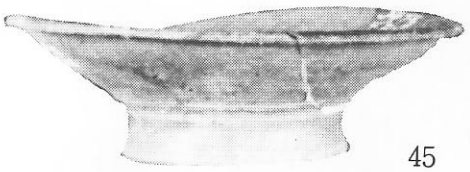


43

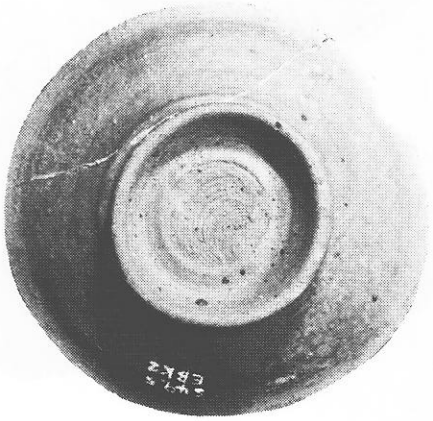




44

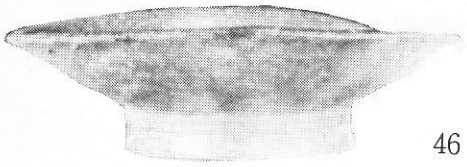


45

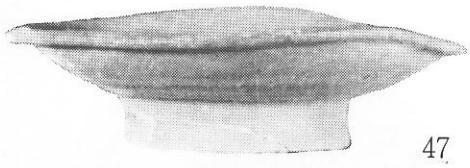


図版12

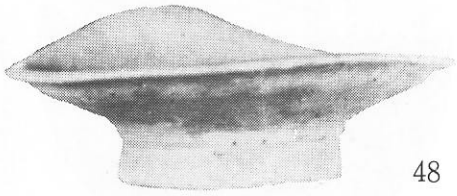
3 号窯跡出土土器



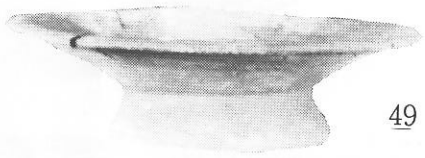
46



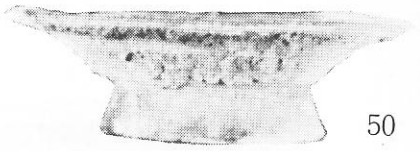
47



48



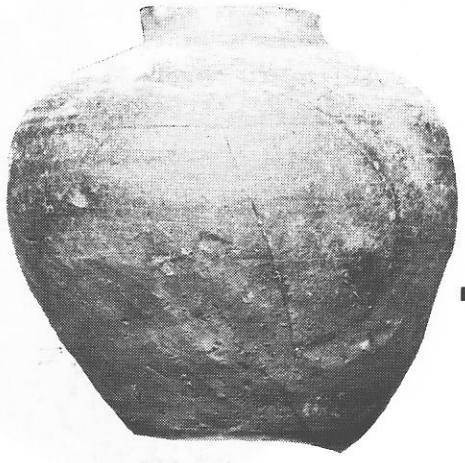
49

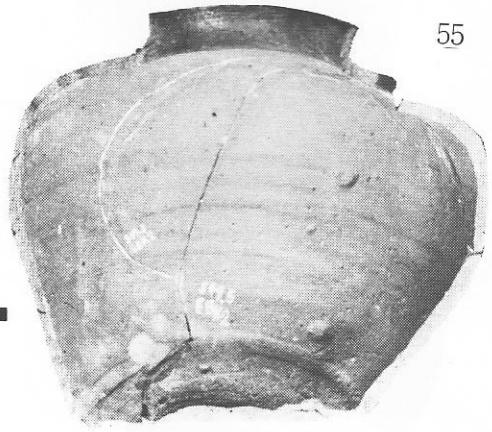


50

51

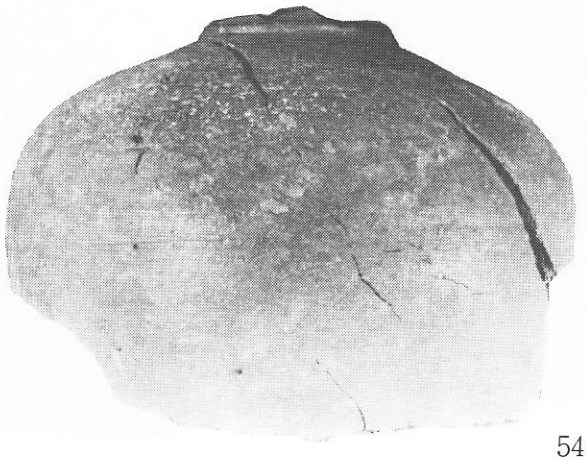
52



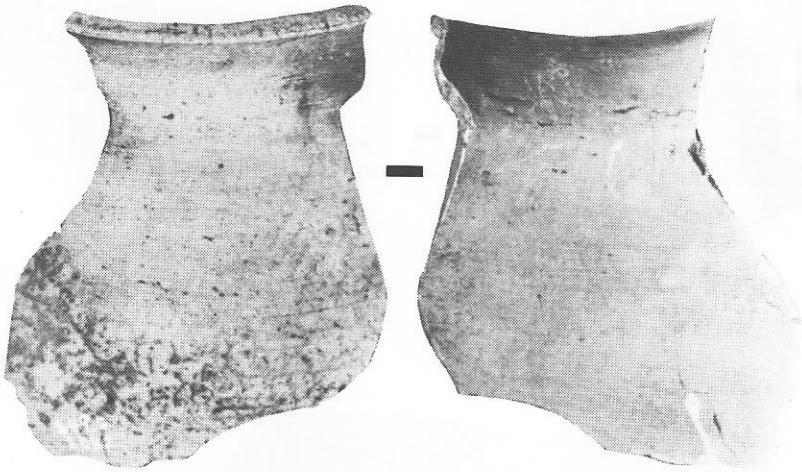


55

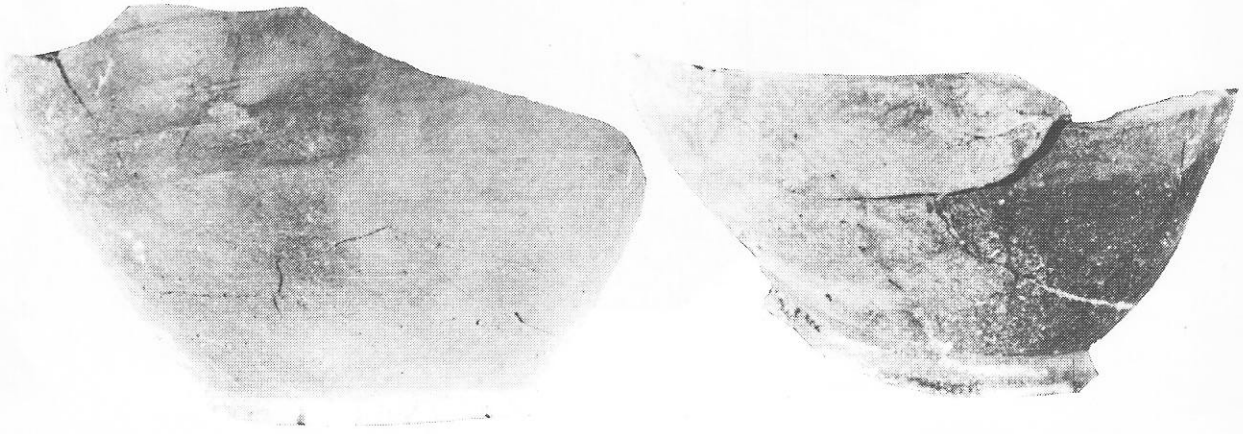
図版13　　3号窯跡出土土器



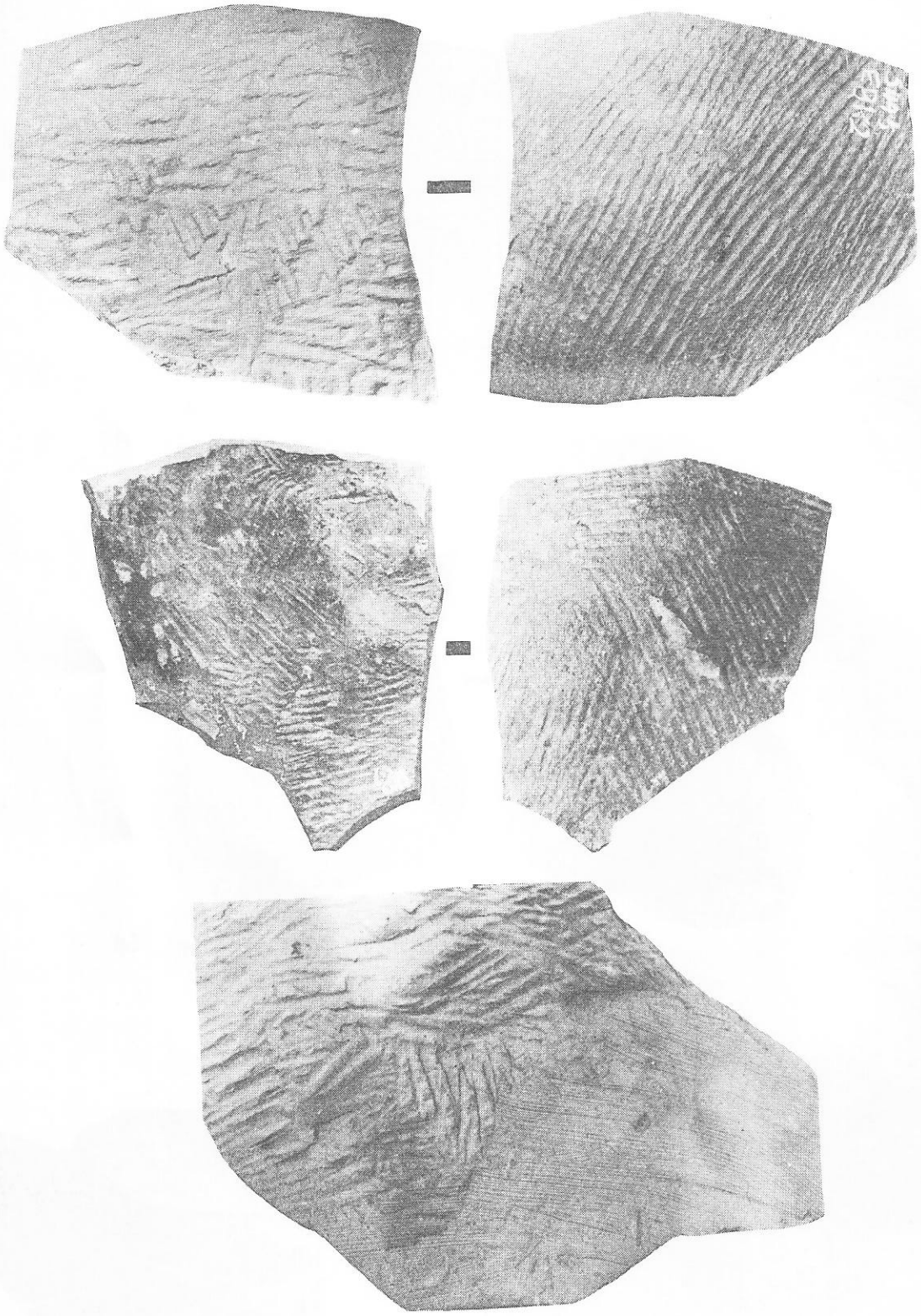
54



56

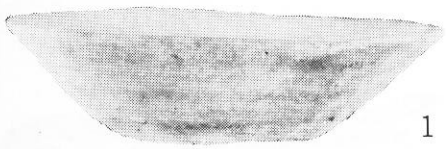


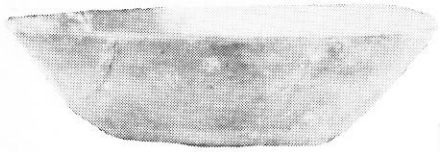
図版14　　3号窯跡出土土器

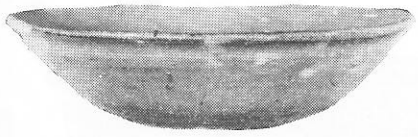


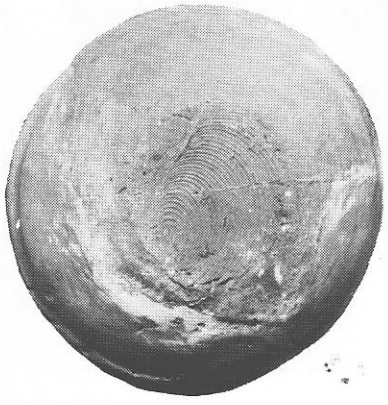
図版15　　3号窯跡出土土器　（重ね焼き）

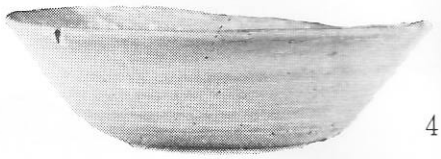
図版16　　3号窯跡天井部の上出土土器

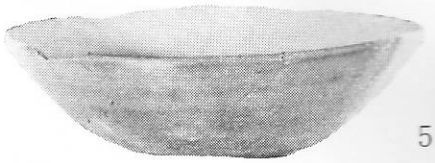

1

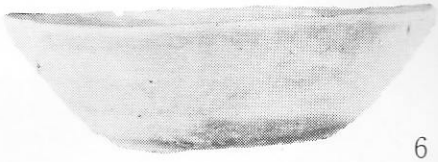

2

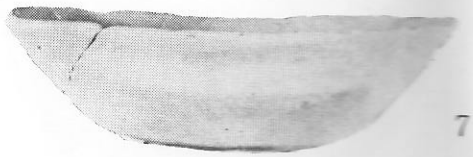

3

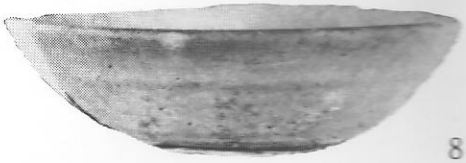



4

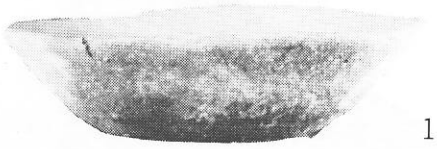

5

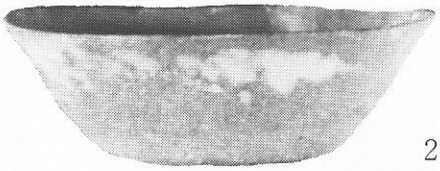

6

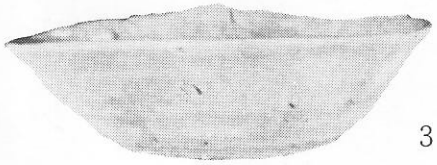

7

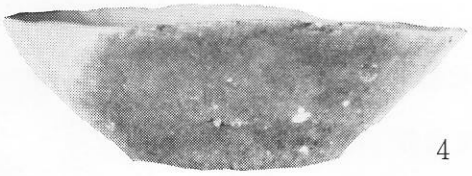

8

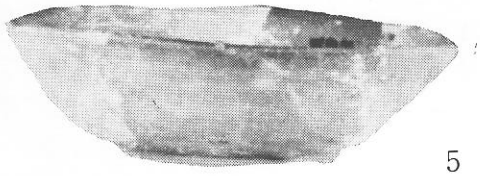
図版17　　4号窯跡出土土器

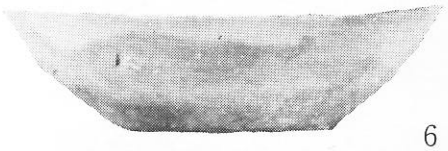

1

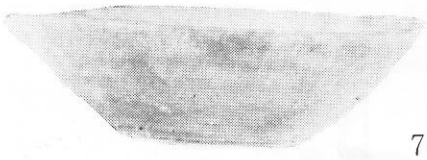

2

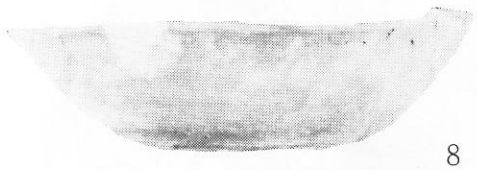

3


4


5


6

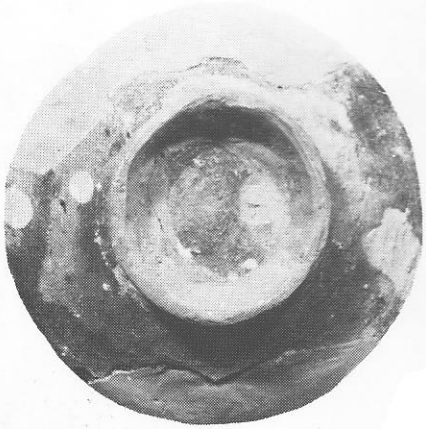

7


8

図版18

4 号窯跡出土土器

9

10

11